ヨハネによる福音書　連続講解説教

始・二〇〇九年一月四日
至・二〇一二年九月一六日

辻　幸宏

本説教集は、二〇〇九年～一二年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヨハネによる福音書は、四福音書の最後に位置し、他の三福音書（共観福音書）とは趣が異なります。一方、ヨハネの手紙（一～三）、ヨハネの黙示録と同一の著者であると考えられており、それらを参照して頂ければと願います。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊
- 公同書簡一　ヤコブの手紙
- 公同書簡二　ペトロの手紙一
- 公同書簡三　ペトロの手紙二
- 公同書簡四　ヨハネの手紙・ユダの手紙
- ヨハネの黙示録
- ヨハネによる福音書一・二

二〇二一年三月

辻　幸宏

「神の業の現れ」　ヨハネによる福音書九章一～一二節

二〇一〇年六月一三日

Ⅰ　主による一方的な救い

福音書では病人の癒しが繰り返し語られています。しかしそれぞれ主題が異なっています。ここで登場する盲人は生まれつき目が見えません。他の身体障害であれば、物心が付く頃、他人との違いに気がつきます。だからこそ、主イエスと出会い、病気が癒されることは大きな喜びです（ヨハネ五章、ベトザタの池での癒し）。しかし生まれつきの盲人は他人との違いには気がついたとしても、目が見えることの素晴らしさを知りません。しかし、主イエスは彼を癒し、目が見えるようにしてくださいます。つまり主イエスは、盲人が望んでもいなかった素晴らしいものを一方的にお与えくださいました。この御業をとおして、主イエスは主なる神としての主権を現わされます。

一方弟子たちはヨブの三人の友人も同様に因果応報を信じています（二節）。「罰が当たった」と言う言い方も因果応報です。しかし、私たちは主の御前に立つことがどういうことであるか確認しなければなりません。最初に人は神から命の息が吹き入れられました（創世記二章七節）。神の被造物として祝福に満ちて、神を賛美し、誉め称え、すべての被造物を治める者でした。しかしこの後、人は善悪の知識の実から食べて、罪に陥り、死ぬ者となりました。すべての不幸、死は、この最初の罪の故に、神との交わりが断たれたことから来ています。

戦争や災害、そして個人に起こる事故などを考えた時、「神は不公平だ」、「なぜ、自分だけ」という声をよく聞きます。しかし主イエスは、「神の業がこの人に現れるためである」とお語りになります。私たちは、主イエスの語りたもうたこの言葉をシッカリ理解し、これを人にも確信していただくことが大切です。あなたの不幸はあなたが神の栄光を顕す機会であり、ここにこそ慰めがあります。つまり、私たちの周囲におとずれる戦争や災害、病などの苦難・不幸を通して、主は神の民を一方的に主の恵みの中に置き、救いに

導いてくださいます。

Ⅱ　再創造

主イエスは、この盲人を癒されることにより、神の御国における祝福がどの様なものであるかを、私たちに示してくださいます。主イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになります（六節）。主は最初、土の塵で人を形づくられました（創世記二章六節）。つまり、ここで主イエスが改めて土をこねたことは、神の被造物としての本来の人間性が回復したことを示しており、新しい人間が再創造されました。

主イエスは、呼び求めることも、恵みに答えることも知らない人に、自ら近づき、目の癒し、救いの恵みに入れてくださいました。私たちも同様です。人は罪の故に神から離れ、死ぬ者・滅びる者となり、自ら救いを求めて立ち上がることすらできません。だからこそ主が私たちに近づいてくださり、神を求め、神に救いを求めようとする心を与え、生きて働く主なる神による罪の赦しと救いを求める者としてくださいました。

Ⅲ　「わたしたちは行わねばならない」

主イエスは、「わたしをお遣わしになった方の業を、わたしたちが行うのだ」とお語りになります（四節）。実際には弟子たちは何もせず、主イエスの行いを理解すらしていませんでした。しかし、弟子たちは何もしないということで、神の御業に参与しています。それは、出エジプトを行い、約束の地カナンに入ったイスラエルの民を思い出して頂ければ明らかです。最初、イスラエル人はカナンの人々を恐れました。その結果、荒れ野を四〇年間、さまようこととなります。しかし世代が代わり、モーセに代わってヨシュアが指導者として立てられたイスラエルは、約束の地カナンに入ります。この時も彼らは恐れますが、主の言葉に聞き従いカナンの人々に勝利をして、カナンに入ることができました。これは、イスラエルがすべてを主に任せて退いて寝ころんでいたのではなく、目覚めて、雄々しく立って、前進して、主と共にいて、主の勝利を見ていました。これが主の民の戦いの原型です。主イエス・キリストが盲人の目を開かれました。この時も弟子たちは、単

なる傍観者でなく、主の御業を見届けることにより、自らも主の御業に参与したことを光栄に思わなければなりませんでした。
父なる神は、御子イエス・キリストをこの世に遣わされたように、弟子たちを宣教の業に遣わされます。そして今キリスト者とされている私たちも、主によってこの世に遣わされています。主は、日々、私たちと共におられ、主の御業を成し遂げてくださいます。私たちは、その主の御業に参与することが求められています。だからこそ、何事に対しても自分勝手な思いに立って行動するのではなく、今もなお働いておられる主の御業に参与させて頂いていることに感謝し、主の御言葉に確認しなければなりません。祈らなければなりません。そのことにより、主がなしたもう御業が何であるかが示され、また同時に私たちが行わねばならない行動が示されていきます。
今から私たちは聖餐式に与ります。私たちはすでにキリストの十字架により罪赦され、神の救いの祝福に満たされています。そして今なお、主は私たちをとおして、主の御業を成し遂げてくださっています。私たちに主の御業が成し遂げられています。だからこそ、主の御業に私たちも参与し、神の国の完成に向けての歩みを続けて行きたいものです。

「お前はあの物乞いか？」　ヨハネによる福音書九章一～一二節

二〇一〇年七月一一日

序

ヨハネ九章には、生まれつきの盲人が癒された奇跡が記されています。前回語ってきたポイントは、①盲人を癒す御業は、主なる神の一方的な恵みとして与えられていること、②この盲人を主イエスが土をこねてその人の目に塗って癒されたことは、主の再創造であり、死に行く人を、主は再創造することにより、キリストの十字架による罪の贖いに与り、

神の子として救うことを示しておられます。

Ⅰ　神の救いに入れられた者の行い

さて、主イエスの御業を受けたこの男はその後どのように行動したでしょうか？　主イエスは、「シロアム―『遣わされた者』という意味―の池に行って洗いなさい」と言われていました。彼は行って洗い、目が見えるようになりました。つまり彼にとって救いの御業はまったくの受け身ですが、それが示された時、彼は能動的に行動する者へと変えられました。つまり神の救いの御業が私たちに行われようとする時、救いの御業は神のご計画に従い、一方的に私たちに与えられます。しかし主の御業が示された者は、主がお語りになる御言葉に聞き従い、行動する者と変えられます。
そして通常、主による救いに入れられた者は、主の御声に聞き従うと共に主に感謝します（参照・ルカ一七章一一～一九節）。従順と感謝は通常一体的に生じます。しかし盲人であった者は主イエスに感謝することなく帰って行きます。この男はダメなのか？　そうではありません。彼は最終的に主イエスの御前に出て、信仰を告白します（九章三八節）。私たちは、祈りが聞き届けられれば喜びますが、主に感謝することを忘れがちです。主の偉大な御業が示された時、私たちは主の御前に自らを省み、主に感謝することも忘れてはなりません。

Ⅱ　決断を迫られる男

しかし神に対する感謝を忘れても、主の救いに入れられた者は、様々な行動を行います。主イエスにより目が見えるようになった男は、周囲の人々に主を証しするものとされます（八～一一節）。しかし同時に周囲の人々にとっては、盲人の目が見えるようになったことは注目の的です。癒された主イエスや病気が癒された盲人であった男をそのままにしておくことは致しません（八～九節）。彼に対して親しくしていた人たちもいたかも知れませんが、多くの人たちは軽蔑していたことでしょう。つまり彼らにとって、彼はあくまでも外から眺め、話しに出てくる話題の人過ぎませんでした。しかしこのことにより、彼は

もう一度、目を癒して頂いた主イエスの所に戻ることが求められます。そして彼は、自らが盲人であったことを告白することが迫られます。

Ⅲ　告白する男

誰であっても隠しておきたい過去があることでしょう。知られずに済んでいることを、あえて自ら告白することはないかと思います。主イエスによって目が癒された彼もまた、目が見えなかったため働くこともできず、物乞い、乞食をしていました。まさに主イエスによって再創造され、新しい人として生きることができる者とされたのだから、過去を隠し、知られないように生きようとしていても、無理はありません。ですから、「違う。似ているだけだ」と語ることもできたでしょう。今まで軽蔑していたような人々に対して真実を語ることによって、改めて軽蔑が起こりかねません。だからこそ、彼は、まったくの別人のように、生き、また働くこともできたかと思います。

しかし彼は「わたしがそうなのです」と正直に告白します。「わたしはわたしである」。主イエスが度々語られた言葉です。主が語られる時、過去・現在・未来の永遠から永遠において無限・永遠・不変の神として存在されることを語る言葉です。しかしここで彼の告白は、過去の自分もまた自分であり、現在の自分も自分であることを語る大切な告白です。つまり彼は、主イエスによって癒されるまでは、生まれつき盲人であり、それ故に働くことができずに、物乞いをしていました。それを彼は認めた上で、今は目が見えるようになり、不自由なく歩くことができる、働くことができます。この違いにこそ、主イエスの御業があり、癒しが行われたことを、彼自身、証しする者となりました。

主なる神によって救われることは、①主の一方的な恵みとして与えられる主の御業に与ることです。しかしそれ以後は私たちの内に起こされる積極的な行動が促されます。②御業を成し遂げてくださった主なる神を信じること、③救いに感謝すること、そして、④救いの御業を人々に証しする者となります。さらに忘れてはならないことは、過去の自分の中には罪の刑罰として死と永遠の苦しみを避けられない存在であった者が、神の救いに入

れられ、永遠の神の国における生命が与えられました。そしてこの罪の赦しのために、御子イエス・キリストが私たちの罪の刑罰を背負うて十字架にお架かりくださいました。ここで⑤罪の悔い改めが行われ、⑥イエス・キリストへの結合があります。つまり、私たちが、「主なる神を信じる」と一言で語る時にも、私たちの信仰の表れとしてしては、様々な側面があります。

「安息日を守るとは？」　ヨハネによる福音書九章一三～一七節

二〇一〇年七月一八日

序

ヨハネ九章は、生まれつきの盲人が主イエスによって癒され、キリストを告白する者とされていく過程が記されています。聖書を読む時は、常に前後の文脈を考えながら読む必要があります。ですから今回も九章全体を思い浮かべつつ、読み進むことが求められます。

Ⅰ　戸惑う人々

前回は、目が癒された男が主イエスの御業を受けてから、信仰告白へと促されていく聖化の歩みを中心に見てきました。今回も彼の聖化の歩みを確認しますが、同時に滅び行く者の姿も確認します。つまり主は、救う者とそうでない者とを予め定められており、主の御業・御言葉が語られ、聖霊の働きにより、明らかになってきます。ですから、神の御業が示されることにより、神の民はキリスト者としての歩みを初め、そうでない者たちは主から離れていく様子を、御言葉は語ります。

盲人であった男から主イエスにより癒された事実を知らされた人々は、直接、主イエスが彼を癒した所にいませんでした。しかしその事実を聞きました。しかし、彼らはこの事実を確認しようとしません。つまり彼らは信じようとしませんでした。困惑していたので

しょうか。彼らは自分たちで判断することを恐れ、この真実、また主イエスが安息日にこの事を行ったことが妥当かどうかの判断をファリサイ人に委ねます。つまり、彼らは真の救い主が近くにいるにも関わらず、離れて行きます。

皆さんは、教会に来ることに戸惑い困惑はないでしょうか？　皆さんが教会に来られたことは、生きて働く主なる神の御働きがあるからです。そして今、主は私たち一人ひとりに主の恵みによる救いにあることを語りかけてくださっています。しかし、困惑を持ちながら主の御前に立ち、主なる神を疑い、主の御言葉に聞こうとしないことは、ここで盲人であった男をファリサイ人に委ねた人たちと同じです。自分には関係ないと思い、人任せにします。主はあなたに救いをお示しくださっています。だからこそ、主の御前に立ち、あなたが主による救いを受け入れることを求めておられます。

Ⅱ　ファリサイ人の言動

盲人であった男はファリサイ人の所に連れて来られました。ファリサイ人たちは最初に彼に尋問を行います。男を連れて来た人々の証言が真実であるか、確認しなければなりませんので当然のことでしょう。男からの証言を聞いた時、私たちであれば何をするでしょうか？そのことが真実であるかどうか確認します。これは正式な裁判ではありませんが、真偽の確定が求められます。ファリサイ人には、その答えを人々に語る責務があります。ですから通常、主イエスがこの男を癒された時に共にいた人々から事情を聞きます。彼は盲人でしたので、一緒にいた人、あるいは手助けをした人々がいたはずです。男が癒されたと語る「あの方」、つまり主イエスにあたることも考えられます。

しかし彼らはそうしたことを一切行わず、語り始めます（一六節）。ここで語られている二つの意見は、語り方は異なりますが、この人が盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかったことにおいては一致しています（一八節）。つまり事実を確認して、「この様な御業を行うのは、神から来た救い主ではないか」と考える者は、いませんでした。ここに、神の救いにない者たちの歩むべき道が示されています。つまり彼

らは、主イエスが盲人を癒した奇跡の問題に対処しなければならないのに、安息日問題を持ち込みます。本来ならば、一つひとつ、別々に取り扱わなければならない問題でした。しかし彼らは最初からイエスが罪人であることを決めつけた上で、二つのことを一緒に考えたことにより混乱し、イエスを救い主として確認することができませんでした。

Ⅲ　主による救いに入れられるとは

彼らは、主イエスが盲人を癒すことにより、主から遣わされたメシアであることを確認することができたはずです。その上で、安息日とは何かを考えることはできたはずです。そもそも安息日とは、ユダヤ人たちが語るように「働いてはならない日」ではありません。安息日とは「主の安息日」です（出エジ二〇章一〇節）。安息日は主を祝福し聖別する日です（創世記二章一～三節）。主が天地万物を創造された時、「それは極めて良かった」のであり、主を祝福するために聖別し休息する日です。しかし罪の中にある現在にあっては、罪の赦しと救いという再創造がされた上での安息が求められます。罪の赦しなしに真の安息はあり得ません。だからこそ主イエスが安息日に癒しを行ったことは、まさに再創造であり、この男は癒しにより、罪が赦され、救われことによる、本当の安息が与えられました。

だからこそ、男は、最初、主の癒しの御業に与った時、こっそり家に帰っていこうとしますが、人々から指摘され、事実を隠さず告白する者とされ、それが誰であっても同じ告白をする者とされます。真実を語ることにより、他人からどのように思われ、あるいは裁かれるかは関係ありません。彼の両親とは違います（二〇節）。そして癒してくださったイエスが、「預言者です」と告白する者とされます。「預言者」とは、主なる神によってつかわされた者です。メシア（救い主）であるかどうかは定かではないが、主なる神からつかわされたことは事実であると告白したのです。

どうでしょうか？　主は、一人の盲人を癒すことにより、主イエスこそが救い主であり、罪の赦しと救いを完成する者であることを示しておられます。そして、その主の癒しの御

業に与った男は、自らの意志以上に、主の働きかけ、周囲の人々との関係において、主イエスを受け入れ、救い主として信じるように、促されていきます。
　一方、彼をファリサイ人の所に連れてきた人々や、ファリサイ人は、主イエスの御業が示され、確認すれば事実を知り、主の御業であることが示されるにも関わらず、自らその事実から遠ざかり、滅びの道を歩み続けます。救いとは、主から一方的に与えられる恵みです。しかし、無関心であること、自ら離れていくこと、拒絶することにより、その人は、自ら主がお与えくださろうとしている救いから離れ、滅びの道を歩みます。
　だからこそ、主イエス・キリストの御業、特に十字架の贖いが示されている今、私たちは、無関心であったり、主から遠ざかったりすることなく、主から与えられている恵み、救いに感謝して受け入れ、主に従っていくことができるように、求められています。主は聖霊をとおして、いつも、私たちと共にいてくださいます。だからこそ、主から離れる者ではなく、常に主と共にあり、主の救いに感謝して歩む者でありましょう。

「主の御前で生きるとは」　ヨハネによる福音書九章一七～二三節

二〇一〇年七月二五日

Ⅰ　盲人であった者の信仰

　生まれつき盲人であった男は、主イエスにより目を癒していただき、同時に永遠の生命に導かれて神の子とされました。最初、彼はただ目が癒されたことを喜んだだけでしたが、すぐに事実を隠すことなく人々に証しすることが求められるようになりました。隠そうと思えば隠すことのできる過去を隠すことなく証言することは、信仰のなせる業です。
　そして彼に与えられた信仰は、主イエスについて「あの方は預言者です」（一七節）と告白させます。ユダヤ人社会でこの告白を行うことは、会堂から追放され、社会から締め出されることを意味します（二二節）。やっと目が見えるようになり、自分の力で生きる手立てができた矢先に、彼は自らそれを断ち切るような行動を行いました。しかし彼の行動は、主イエス・キリストにこそ真の命、真の救いがあることが示され、人間社会のしがらみから解放された結果です。まさに神を信じるとは、彼のように主なる神から一方的に恵みが与えられ、彼の心は変られました。彼の心の変化は、主イエスと出会い、主の御力を知り信じたことから生じた結果です。
　私たちに求められることは、この生きて働く主なる神の存在を受け入れることです。神の存在が私たちの前で小さければ、神の救いの御業、愛よりも、自分の行動が優先してしまい、周囲の人々の反応を気にしてしまいます。そして神の御力を限定してしまいます。私たちに求められるのは、この男のようなこの真実な信仰告白です。

Ⅱ　ユダヤ人社の信仰

　一方でユダヤ人は、主イエスの行われた御業を信じることができませんでした（一八節）。そして彼らは主イエスを信じる者を追放し、主イエスを十字架に架けるように進んでいきます。
　彼らにとっての信仰とは何を意味していたのでしょうか？彼らもまた救いを求めていました。彼らにとっての救いは、律法を守ることによって獲得できるものでした。つまり、彼らにとっての律法とは、旧約聖書そのものではなく、律法の専門家たちの言い伝えでした。それらは旧約聖書において規定されていたことから逸脱したものです。だからこそ主イエスのように自分たちの語る律法を否定する者を、神と受け入れることはできませんでした。つまり彼らにとって神とは、何も語らず、自分たちの行動をすべて受け入れてくれれば良かったのです。それは、自分が神であり、自分が律法となっているからです。

Ⅲ　目を癒された男の両親

　そうした中、彼らは男の両親に証言を求めます。ユダヤ人たちは、ユダヤ人である両親が、自分たちの正当性を証言してくれるとの期待していました。そして両親も、ユダヤ人

として彼らの求めに答えようとします。両親は、ユダヤ人の会堂から追放されることを恐れていました（二二節）。そのため、両親は、自分の息子が盲人であったこと、目が見えるようになった事実は語りますが、その喜びが誰によってもたらされたのかや、どのように行われたのかはまったく語りません。それを語らないことは、両親にとってユダヤ人社会の一員でいることが何よりも重要なことであったことを意味します。つまり両親にとっての救いとは、ユダヤ人社会の中にあることによって成り立つのであり、その外には考えられません。つまり彼らにとっても、生きて働く主なる神、救い主の存在は、ユダヤ人たち同様に、形だけのものとなっており、主なる神を畏れ敬う信仰はなく、むしろユダヤ人たちを恐怖として恐れていました。

Ⅳ　私たちの信仰

　では、私たちにとって神はどの様な存在でしょうか？　日本の教会は、戦時中、偶像崇拝の罪を犯しました。それは、天皇は神であるか？キリスト者は神社に参拝しないのか？が問われ、迫害されることを恐れて、天皇を神のごとく宮城を拝み、神社は神に非ずとして神社に参拝しました。これは主を忘れ、目の前に迫った恐怖におののいた結果です。

　その当時の状況に置かれれば、致し方がなかったとも語られます。しかし、私たちが本当に恐れなければならないのは、永遠の生命を与えることもでき、また永遠の裁きを行うこともできる主なる神であり、肉体は殺すことができても魂を殺すことのできないサタンや周囲の人々ではありません。人々を恐れ、真実を歪めたり、真実を隠して証言を変えることは、生きて働いておられる主なる神の存在を受け入れていないからです。人を見るのではなく、神の御前に立ち続けることが、私たちに求められています。

「神から来た方」

ヨハネによる福音書九章二四～三四節

二〇一〇年八月一日

Ⅰ　神に栄光を帰する

　日本語聖書は翻訳であり、時として誤訳もあります。二四節、新共同訳は「神の前で正直に答えなさい」と訳します。これはカトリックのフランシスコ会聖書研究所訳を踏襲しています。しかし新改訳聖書では「神に栄光を帰しなさい」と訳し、プロテスタント教会のいずれの訳も同様です。この読み方の違いは、信仰の違いとして表れであり重要なことです。これは「全知全能である主なる神が、すべてを支配し、すべてをご存じであるからこそ、何一つ隠すことができない。だからこそすべてを正直に答えなさい」と語っています。つまり、主なる神がどの様なお方であるのか、確認しなければなりません。

　神の栄光は、私たちが創り出すことはできません。全知全能であり、生きて働く神がおられます。その方は、御自身で栄光を讃えることができるお方です。そして主の栄光は、キリストの御業によって私たちに示されています。だから私たちが神の栄光を覚える時、讃えるのではなく、神に栄光を帰するのです。ちょうど太陽の光が月に写り私たちは月が光っているように見えるように、神の栄光がすでに私たちに示されており、私たち自身は空虚な者ですが、私たちの信仰告白・善き業により、主の栄光が示されます。そして、「神に栄光を帰する」ことを考える時、ウェストミンスター小教理問一を忘れてはなりません。「人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです」。まさに、人間が主なる神によって創造され、命が与えられた一番の目的は、私たちが神の栄光を見て、それを表し、そして神によって生かされていることを喜ぶことにあり、これが私たちの永遠の喜びです（参照・Ⅰコリント一一章三六節）。

Ⅱ　宗教による脅かし

　ユダヤ人は「神に栄光を帰しなさい。わたしたちは、あの者（主イエス）が罪ある人間だと知っているのだ」（二四節）と主の御前で語ります。彼らにとっての真理は、彼らが持っていた律法です。「自分たちは正しい」という前提です。彼らも救いを求めていまし

たが、本当の意味では生きて働く主なる神の御前に立っていませんでした。主なる神を畏れることなく、真の意味での神の栄光を受けていませんでした。その彼らが「神に栄光を帰しなさい」と語りつつ証言を求めることは、人間にとって一番弱い部分である救いを人質にとって「自分たちの意に反することを語れば、ただでおかない」との脅しを行っていたのと同じです。宗教的なパワハラ（パワー・ハラスメント）です。盲人であった男の両親は、まさに主の御前に生きる以前に、ユダヤ人社会に生きる者として、ユダヤ人たちの脅かしに屈する形で証言を行いました。

　こうしたことは歴史において繰り返されます。一つの例が、宗教改革が起こる原因となりました免罪符です。当時の教会は、地上の生涯において罪の償いを完全に行うことができないと語り、死者は中間層である煉獄に行くと言われていました。そして、死者が完全に救われるには、教会による罪の償いが必要であると唱えたのです。そして免罪符という札を売りつけました。ルターが教会の門に九五箇条の提題を張り出したのは、まさにこの免罪符の過ちを指摘するためであり、このことがきっかけに宗教改革が始まりました（一五一七年一〇月三一日）。

Ⅲ　主に栄光を帰する生活

　このようにユダヤ人たちは、「神に栄光を帰する」ように求めつつ、盲人であった男に対して改めて証言を迫ります。つまり彼らの求めていた証言とは、「もし目が癒されたのであれば、神の憐れみであるからこそ、神にのみ栄光を帰さなければならない。イエスという人に神の栄光を帰せてはならない」ということです。この事だけを取り上げると、たしかに神に栄光を帰する時、私たちは人間にそれと同等の栄光を讃えることはあってはなりません。教会において人を賞賛する時には注意しなければならず、偶像化してはなりません。しかしここで問題となっているのは、「あの方」と呼ばれ続けている主イエスが、どの様な御業を行われたのか、そしてその御業を行う力はどこから来ているのかです。ユダヤ人たちは、このことを確認しなければなりませんでした。しかし彼らは何もすること

なく、「あの者があの人間だと知っている」と決めつけました。そこが問題です。

　そうした中、主の御業に与り、主イエスによって目を癒していただいた男は、ユダヤ人たちの脅かしに屈することはなく、真実を告白します（二五節）。彼は全知全能である主なる神の御前に立ち、自らのありのままを包み隠さず告白します。これこそが、神に栄光を帰するキリスト者の姿です。彼は、ユダヤ人の前で「あの方は預言者です」（一七節）と語り、さらに「あの者が罪ある人間だ」と語っているユダヤ人の前で「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません」と、ユダヤ人に臆することなく告白します。彼が行った証言は、神によってなされた御業を、少しも減じることなく告白しているのであって、神の御業を行った方こそが「あの方である」と語っています。そればかりか、彼は主イエスへの信仰を告白致します（三〇～三三節）。つまり、彼は、自らの目を癒してくださった方が、神から来られた方であり、神そのものであることを告白しました。

　まさにキリスト者である私たちの日々の歩みは、すべてが主なる神の御支配の下、主の恵みによって司られています。だからこそ私たちに日々与えられる喜びは、主なる神から与えられた恵みです。主の御前に生きることは、こうして与えられる神からの恵みが、神から与えられていることをはっきり自覚し、感謝し、告白・証言することです。これこそが、神の御前に生きるキリスト者の姿であり、神に栄光を帰することです。

「主よ、信じます」　ヨハネによる福音書九章三五～四一節

二〇一〇年八月八日

序

　私たちが今日、与えられた御言葉から確認することは、私たちが主イエス・キリストに

対する信仰を告白するとはどういうことかということです。

Ⅰ　私たちと共にいてくださる主イエスを忘れるな！

盲人であった男は、ユダヤ人たちの前でイエスが神のもとから来たことを告白することにより、ユダヤ人たちの会堂から追い出され、ユダヤ人社会から締め出されます。人間的に考えれば、せっかく目が癒され、これから社会の一員として働き、貢献することができるようになったのです。自分からあえてそのユダヤ人社会から出て行くことはないでしょう。しかし彼は真実を歪め隠すことができませんでした。つまり彼は、イエスが自分の目を癒してくださった事実を受け入れ、この方が神から来た方であることを受け入れました。

しかし、自ら主イエスの前に行き、積極的に主イエスに従っていく意志は持っていませんでした。なぜならば、主イエス御自身が来てくださり、「あなたは人の子を信じるか」と言われた時、「主よ、その方はどんな人ですか」と、目の前に立っておられる主イエスと目を癒してくださった方とが結びつかなかったからです。しかし、このようにユダヤ人社会から締め出された男の前に主イエスは来てくださいます。否、主イエスは彼を癒した時から彼と共にいてくださいました。そして、主イエスは彼に対して「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ」と語られることにより、彼は、目の前におられる主イエスこそが、人の子であり、自分の目を癒してくださった主であることを受け入れ、「主よ、信じます」との信仰を告白する者へと促されていきました。

このヨハネ九章を読み進んでいますと、ひとりの人が主によって救いに導かれる過程が示されていると私たちは考えます。しかし、私たちがこのヨハネ九章を読む時、常に中心に置いておかなければならないことは、彼を癒し、そして彼に信仰告白へと導いた主なる神の御子イエス・キリストです。

Ⅱ　救いの秩序

多くの人たちは、神を信じる信仰告白は、私たち人間の意志であると思っています。しかし、ここに主なる神が介在しておられることを私たちは忘れてはなりません。私たちが

主なる神を信じて信仰告白するのは、主なる神の救いのご計画に基づいて行われる主の御業です。

私たちを救いに導くために、イエス・キリストは十字架に架かってくださり、私たちの罪を贖ってくださいました。それが、聖霊によって有効に私たちに適用され、御霊はわたしたちの内に信仰を起こしてくださいます（ウェストミンスター小教理問二九～三〇）。そして、有効召命によって神の霊が、私たちに①自分の罪と悲惨を悟らせ、②キリストを知る知識で照らし、③意志を新たにし、福音において無償で私たちに提供されているイエス・キリストを受け入れるように、私たちを説得し、また実際受け入れることができるようにしてくださいました（同問三一）。こうしたことは、盲人であった男に対して、主イエスが一方的に近づいてくださり、目を癒してくださったこと、家に帰ろうとしていた彼に事実を告白するように促されたこと、さらにはユダヤ人の前で、主イエスが神のもとから来られたことを告白したことにより、確認できます。これは彼の自発的な行動ではなく、主の御霊の働きに対して、彼はいわば受動的に受け入れたのです。こうしたことは、義認・子とすること・聖化においても言えます（同問三三～三六）。「神の無償の恵みによる決定」、「神の無償の恵みによる御業」です。

だからこそ、私たちの自発的な行為と見られている信仰告白・罪の悔い改めは、「救いに導く神の恵みの賜物」です（同問八六、八七）。つまり、救い・信仰とは、自分で探し出して、自分で獲得するもの、勝ち取るものではありません。救い主イエス・キリストは、御言葉をとおして、今、私たちの前に立っていてくださいます。「インマヌエル（主は我と共におられます）」。そしてこの主イエス・キリストは、すでに二〇〇〇年前に、十字架の贖いを成し遂げ、私たちの罪の償いを行ってくださいました。だからこそ私たちは、救い・信仰という心の目が今まで閉じられており、主イエスを見ることができなかったのですが、今は、御言葉を通して、救い主イエス・キリストが共におられ、主イエス・キリストによる救いにあることが示されています。だからこそ、私たちは、主がお与えくださ

った救いに感謝をもって、信仰を告白し、罪の悔い改めを行います。

Ⅲ　信仰の目

主イエスはここで①肉体的に見えなかった彼の目を見えるようにしてくださることを通して、②彼の心の目である信仰・救いも見えるようにしてくださり、目の前に立っておられる主イエス・キリストを受け入れ、主イエス・キリストに対する信仰を告白する者としてくださいました。だからこそ主イエスは、「こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」（三九節）とお語りになります。

しかしこのことは同時に、「自分は救われている」と豪語している者に対する裁きをも意味しています。つまりユダヤ人のように、「自分はアブラハムの子孫だから救われている」との確信の下、目の前に立っておられる主イエス・キリストを見上げない者、主イエスがお語りになる御言葉に耳を傾けない者は、真の救い主を見ておらず、主イエス・キリストに結ばれていない者は、真の意味で神の救いには入れられていません。長い信仰生活を送っている方々は、同じ過ちを犯してはなりません。信じる者は救われています。しかし私たちの心の目を開いてくださった主イエスに留まり続けること、主の御言葉に聞き続けることが求められています。だからこそ私たちは、自ら遜り、御言葉を通してお語りくださる主イエス・キリストを見上げ、主イエスの御言葉に耳を傾けなければなりません。

「羊と羊飼い」　ヨハネによる福音書一〇章一～六節

二〇一〇年八月一五日

序

盲人であった男を主イエスは癒してくださり、目を見えるようにしてくださいました（九章）。主イエスは同様に私たちの心の目をも開け、神による救いを求めるように働きかけてくださいます。ユダヤ人であるファリサイ人たちは、自分たちは目が見えている、神の救いにあると主張していました（九章四〇節）。しかし主イエスは一〇章に入り、羊と羊飼いの譬え話しを始めることにより、ファリサイ人たちの現実の姿を明らかにされます。つまり、一〇章は九章と別のことが語り始められたように思いますが、継続性があり、私たちは前後の関係を考えつつ読み進まなければなりません。

Ⅰ「はっきり言っておく」

冒頭、主イエスは重要な時に語る常套句「はっきり言っておく」と語ります。「アーメン、アーメン、あなた方に告げる」と直訳できます。つまり主イエスは、ファリサイ人たちに真理を語ろうとされています。主イエスが語られる真理とは何か？「羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である」ことです。詩編二三編が代表するように、旧約聖書の時代から主なる神と選びの民であるイスラエルとの関係を羊と羊飼いの関係で語られてきました。羊飼いである主なる神と、羊であるイスラエルの民です。そして、ファリサイ人たちは、「自分の目は見えている」と語り、自分たちは「まさしく羊飼いに飼われている羊である」と言い張ります。

しかし主イエスは、そのファリサイ人に対して、あなたたちは「盗人であり、強盗である」と語ります。自分は救われたいと願っているにも関わらず、主なる神である主イエスがそれを拒まれます。これはどういうことなのでしょうか？

Ⅱ　天国の門、羊と羊飼い

ここで羊の囲いの中とは、天国のことです。そして家に玄関があるように、天国にもそこに入るための門が設けられています。つまり一概に救われたいと願っても、何によって、どのように救われたいのかが問われています。

そうした状況の中、主イエスは門から入る者が羊であると語られます。つまり天国に入るためには門を通りますが、羊飼いによって導かれなければ、天国に入ることはできません。つまり完全予約制です。そして、天国にエステートしてくださる方こそ、主イエスで

あると、聖書は語ります。主イエスは、神の御子として、天から降られ、遜り、人としてお生まれくださいました。そのお方が、天国へ帰られます。まさに、主イエスこそが門から入る羊飼いであられることを語っています。つまり、救われたい、天国に入りたいと願うのであれば、天国に導いてくださる主イエス・キリストの所に来なければなりません。そして天国に行く会員となる予約をしなければなりません。

　主イエスは三つのことを語られます（三節）。第一に、門番である父なる神は羊飼いである御子イエス・キリストでなければ、門を開くことはなさいません。つまり救いに与り、天国に行こうとするならば、イエス・キリストと共にでなければ行くことはできません。主イエス・キリストは私たちの仲保者として、永遠の生命に与る天国と私たちとを結ぶ唯一のお方です。

　第二に、羊はその声を聞き分けます。羊とは、主イエスを信じ、キリストの御言葉に耳を傾けるキリスト者のことです。信仰とは、主なる神から与えられた恵みの応答であり、主なる神の主権の下、聖霊と御言葉の働きによって私たちに示されています。だからこそ信じる者は、神の羊として、羊の囲いである天国に入る許可を受けています。しかしファリサイ人たちは、この羊飼いである主イエスの御言葉に耳を傾けません。つまり、彼らは天国という羊の囲いに入る正規のルートを通ることを拒絶し、密入国者として主なる神によって捕らえられ、処罰されます。

　第三に、羊飼いである主イエスは羊であるキリスト者の名を呼んでくださり、天国へ連れて行ってくださいます。ここで「名前を呼ぶ」とは知っておられることです。羊飼いが自分の飼っている羊のすべてを知っており、名前を付けて、一匹残らず連れ戻してくださるように、主イエスも、キリスト者をひとり残らず知っておられ、神の国に導いてくださいます。

　従って神が予定において救いに入れてくださる神の民が、たとえひとりでもいなければ、探してくださいます（参照・ルカ一五章一～七節）。

Ⅲ　偽キリストの排除

　天国に導いてくださるのは主イエスただおひとりでです。上に立てられているローマ皇帝や権力者は、いつまでもその地位にいることはできません。時期が来れば、あるいは肉体的な死を迎えることにより、交代していかなければなりません。しかし主イエス・キリストは唯一の仲保者です。主イエスは十字架と復活の後、天国に上って行かれました。そこで今なおすべてを支配しておられ、御霊と聖書を通して、私たちに働きかけてくださいます。従って「私がキリストの甦りだ」、「私がキリストの後継者だ」と語る者は、偽キリスト、偽預言者であって、彼らは羊の囲いである天国に属することはできません。

　今日、八月一五日は、六五年前に戦争が終わった敗戦の日です。私たちはこの時、平和を考えるだけではなく、当時の日本の教会は、羊飼いとしての主イエスの他に神社・天皇をその地位に置いたことを忘れてはなりません。当時の教会は、迫害の中、苦悩があったかと思いますが、主イエスが私たちに示してくださっている御言葉から離れてしまいました。

　羊である私たちは、羊飼いである大牧者イエス・キリストの声に耳を傾けるだけではなく、他の者には決してついて行ってはなりません。逃げなければなりません。そこに危険・誘惑があり、私たちの信仰を歪めるからです。

　だからこそ、私たちは主イエス・キリスト以外に救い主はなく、主イエス・キリストがお語りになる聖書の言葉以外に、救いに導く声はないことを覚えなければなりません。

「羊のために命を捨てる主」　ヨハネによる福音書一〇章七～一八節

二〇一〇年八月二九日

Ⅰ　主イエス

主イエスは再び「はっきり言っておく」、つまり「アーメン、アーメン、あなた方に告げる」とお語りになり、「わたしは羊の門である」ことも神の真理であることを語ります。つまり、主イエスは御自身が羊飼いであるとお語りになることにより、御自身が羊であるキリスト者を、羊の囲いである神の国に導く者であり、神と人との仲保者であることをお語りになりました。しかしここでさらに御自身が「羊の門」であるとお語りになることにより、羊を盗人や強盗から守る力強い保護者・統治者であることを明らかにされます。

羊とはそもそも弱い動物であり、盗人や狼などの外敵から狙われた時、自ら戦うことなどできません。そのため、羊飼いによって守ってもらわなければ、命を得ることはできません。主イエスはそのために羊の群れの中に入られ、羊を保護し、外敵を排除する者として自らを「門」であるとお語りになります。このことは、主なる神と私たちの関係が、父と子によって語られている御言葉によっても明らかです（ヨハネ三章一節）。父親は、子どもが危険な状況に遭遇すれば、命を張ってでも子どもを守り、同様に主イエスは、私たちが危険な所に行った時、体を張って助けてくださいます。

Ⅱ　盗人・強盗

では私たちにとって何が危険なのでしょうか？　主イエスは「わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である」と語られます（八節）。ここで私たちが誤解してはならないことは、主イエスより前に来た者が皆、盗人でありません。アブラハム・イサク・ヤコブといった族長たち、モーセやダビデのように預言者、王などの旧約の人々は皆、盗人、強盗として数えられていません。「盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするため」（一〇節）であり、羊を囲いの中から遠ざけ、主なる神への信仰から遠ざける者のことです。しかし旧約の族長や王・預言者たちは、羊飼いである主イエスの所を約束のメシアとして指し示し、主イエス・キリストを通して与えられる救いに導いています。

ここで語られている盗人・強盗とは、明らかにユダヤ人である律法学者やファリサイ人たちのことです。つまり、主イエスの時代、彼らは、自らが神の救いに導く者として、人

々を指導していました。しかし彼らは、主イエスの言葉に聞くことがなく、かえって人々を神の救いから切り離す者となっていました。

このことは、九章における議論によって明らかになります。主イエスは生まれつきの盲人の目を癒す御業を行われました。この時、主イエスは「今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」（四一節）とお語りになりました。つまり盲人であった者は、身体的に目が見えるようになったと同時に、心の目が開かれ、救い主であるキリストを受け入れ、信じました。一方ファリサイ人たちは、自分たちは救いが見えていると語り、人々を指導していたにも関わらず、目の前で、主イエスによって神の御業がなされたにも関わらず、受け入れること・信じることができませんでした。まさに「見える」と語ることによって、彼らは実際には信仰の目は閉ざされていることが明らかになります。だからこそ主イエスは、彼らは信仰の目が閉ざされており、神の民を盗む盗人・強盗であると語っておられます。

こうした盗人・強盗は、主の羊である私たちキリスト者の周囲にも多く存在します。キリスト教を名乗りつつ、キリストに救いを求めないエホバの証人・統一協会・モルモン教などの異端者は、聖書を用いキリスト教を装いつつ、実は自分たちの教祖へと導き、主イエスを救い主とは認めません。また、異教宗教、世俗化も、同様に私たちを誘惑し、主イエスから切り離そうとする力であることを考えれば、同じです。私たちは、こうした盗人・強盗を、軽く見て、自分は大丈夫だと安易に考えてはなりません。私たちは主の御前に立つ羊であって、盗人・強盗が来れば、逃げ惑うことしかできません。だからこそ羊飼いである主イエスの助けを求めなければなりません。それが神礼拝と祈りからなる信仰です。

Ⅲ　羊の門としての主イエス

そして羊の門として羊を神の国という柵の中に導く主イエスは、盗人・強盗が来れば、彼らを閉め出します。主イエスは、自らの体を張って強盗と立ち向かってくださいます。だからこそ私たちは安心して信仰生活を送ることができます。私たちが異端者・異教・世

俗といった偶像・盗人・強盗と戦い、勝利を遂げなければならないのではなく、主イエスが私たちに代わって勝利を遂げてくださり、私たちは守られます。

外からの攻撃だけが私たちの信仰の誘惑ではありません。一番深い所にあるのは、私たち自身にある罪です。この罪を背負うたままでは、門番の所を通って、神の国に行くことはできません。この最後の強盗に対して、主イエスは十字架の死という命を張って、私たちを守り・救い・神の国に導くために戦ってくださいました。そしてキリストは十字架において既に勝利を遂げてくださいました。キリストの御業・キリストの罪に対する勝利により、私たちは神の子に相応しい者とされ、神の国に入ることが許されています。

救われ、神の国に入るためには、この羊の門である主イエスの所に来るしかありません。

盗人・強盗は魅力的です。しかしそこには破滅しかありません。「わたしは羊の門である」とお語りくださり、私たちを徹底的に守ってくださり、神の国に導いてくださる主イエスを信じ、主イエスの御言葉に聞き従った歩みを行い続けて行かなければなりません。

「悪霊に取りつかれるとは？」　ヨハネによる福音書一〇章一一～二一節

二〇一〇年九月五日

Ⅰ　神の側の予定と招き

主イエスは、御自身が羊飼いであり、私たちキリスト者が羊であるとお語りくださいます。そして主イエスは、「わたしは自分の羊を知っている」（一四節）とお語りになります。つまり、神の国に招かれているすべてのキリスト者一人ひとりを、主はご存じです。それは、すでに神を信じて神の民とされている者だけではなく、これから神の民とされていく人々も含まれています（一六節）。

主なる神は、永遠のご計画において、すべての神の民を選んでおられ、知っておられます。主イエスは神の御言葉である聖書と教会をとおして、そのすべての神の民を、神の国である天国にお招きくださいます。そしてこの福音の中心は、キリストが「わたしは羊のために命を捨てる」（一五節）とお語りになるように、主イエスが私たちの罪を贖うために十字架において死を遂げてくださいました。キリストの十字架の贖いが私たちに適用されることにより、私たちキリスト者は、主の恵みの内に罪が赦され、義とされ、神の子とされ、聖にされ続けています。つまり救いとは主なる神の一方的な恵みです。

Ⅱ　人間の側の応答

一方、「羊もわたしを知ってい」ます（一四節）。主なる神による救いの御業が私たちに一方的なものとして与えられるのは、何か強制的に、首根っこを引っ張られるように教会に連れてこられ、強制的に礼拝に出るようにされている操り人形のように思われることもありますが、そうではありません。「羊もわたしを知っており、主イエスの声を聞き分ける」と語られるとおり、主なる神の御業が私たちに示された時、同時に聖霊が私たちに働き、私たちの心に変化が生じます。そして、主がお語りになる御言葉に聞く者となり、主を受け入れます。その結果、自らの罪に生きる者ではなく、主の御言葉に聞き、御言葉に生きる者となり、善き業が生じてきます。

パウロは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一六章三一節）と語ります。私たちが主イエスを信じることができるのは、すでにそこに聖霊が働き、主イエスの十字架の贖いがすでになし遂げられているからです。

私たちはこの後聖餐式に与りますが、聖餐に与るに際し、私たちは自らの信仰を吟味し、神の民として生きていく上で、自らを省みなければなりません。しかし立派な信仰生活を送っていないから怒られているのではありません。私たちの罪を主はすべてご存じの上で、あなたのその罪を主イエスが十字架において贖った、あなたの罪は赦されたと宣言してくださっています。だからこそ、聖餐式に招かれることにより、私たちは自らの信仰を吟味し、今ある罪も赦された救いの感謝と喜びに導かれるのであり、主に仕えていく者として

の献身を新たにさせられるのです。

Ⅲ　悪霊に取りつかれている？

しかし現実には、主によって招かれることのない人たちがいることも否定できません。日本のようにキリスト者の人口が少ない場所にあっては、家族のこと、友人のことなどを思い、主の招きにない人たちのことがよく話題に上ります。しかし私たちは自らの在り所を確認しなければなりません。主なる神が創造主であり、私たち人間は主の被造物であるということを。そして人は主の御前に罪人であり、このままの状態では滅び行く者でありました。そうした状態の中にあって、主は、主の御言葉に聞き従い、信仰を告白する者をキリストの十字架の御業による罪の赦しと救いに引き入れてくださいました。すでに信仰を告白した者、あるいはこれから信仰を告白する者は、すでに救われており、滅びの恐怖におびえることはありません。しかし、結果として主の裁きに遭う人々は、主イエスを拒絶し、主イエスの十字架の御業を否定します。従って、彼らは自分自身の言動によって、主の御前に立たされ、主の裁きに遭います（一九～二一節）。

つまり、主イエスが御業を行われ、御言葉が語られる時、それを受け入れる者と、拒絶する者とに別れます。ここに決断が求められます。もちろん、決断を下し、主を信じるまでに長い期間かかる人もいます。今まで生きてきた価値観との格闘があるからです。彼らは、主イエスの御業に触れ、主イエスの御言葉に聞いた時、イエスを神とすることに対して、最終的な拒絶をすることはありません（二一節）。しかし主の裁きにさらされる者たちは、最終的に主イエスを拒絶します（二〇節）。まさに、主イエスの御業が示され、主の御言葉が語られつつも、それを拒絶することによって、主の裁きがもたらされます。

今、私たちには、主イエス・キリストの十字架による罪の赦しと救い、永遠の生命が示されています。主から与えられた一方的な恵みと祝福を否定する者ではなく、素直に受け入れ、信じる者であっていただきたいものです。

「救い主の声を聞き分ける」

ヨハネによる福音書一〇章二二～三〇節

二〇一〇年九月一二日

序

主なる神によって救われる者とそうでない人がいる、このことは家族や周囲の人たちの多くが未信者である日本のキリスト者にとっては大きな躓きです。前回は、救いに与る者に与えられる主なる神からの一方的な恵みが与えられること、そして滅びに行く者は主イエスの恵みを拒絶することを確認してきました。今回はその続きです。

Ⅰ　主イエスを受け入れないユダヤ人

ユダヤ人たちは主イエスを見つけると取り囲みます。そして「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と迫ります。ユダヤ人たちもメシアを待ち望んでいました。しかしここで彼らはイエスのことをメシアであると信じようと駆け寄ってきたのではありません。彼らは主イエスがメシアであろう言動を行っていることを薄々理解しつつも、それを拒絶しています。

つまり彼らが語っていることは、主イエスがメシアであるとの確信を得たいというものではなく、むしろ主イエスを逮捕するきっかけを探っていました。つまり主イエスがサタンの誘惑に遭った時のサタンの言葉（参照・ルカ四章）や、主イエスが逮捕され十字架に架けられている時に、「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」（マルコ一五章三一～三二節）と語った言葉と同じであり、彼らはここにおいても神を試みます。

このことは、「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と語る言葉に表れています。言葉尻を捉えようとする悪巧みがここにあります。「はっきり」という語は、一・七節において主イエスが「はっきり言っておく」「アーメン、アーメン」と語られた言葉とは別

であり、「あからさまに」、「大胆に」、「率直に」、「公然と」、「確信をもって」と訳せます。

つまりここで問題とされるのは、主イエスの御言葉・御業を受け入れることができなかったユダヤ人たち自身の信仰、心の目です。

Ⅱ　主イエスの御言葉・御業

だからこそ主イエスは彼らに「わたしは言ったが、あなたたちは信じない」とお語りになります（二五節）。主イエスが父なる神との関係をお語りになったことを、私たちは御言葉から聞き続けました（五章、八章等）。また主イエス御自身が行った奇跡の御業も、私たちは確認してきました。三八年間寝たきりの男を癒された御業がありました（五章）。生まれつきの盲人を癒された御業がありました（九章）。つまりユダヤ人たちは「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と主イエスに迫りますが、主イエス御自身は「むしろ問題なのは、あなた方がこのことを信じることができないことだ」と、語られます。

つまり主イエスは聖霊をとおして霊的な目である信仰に訴えたのですが、ユダヤ人たちは信仰を抜きに、自分たちの解釈に基づく律法に従って世的に解釈したのです。つまり彼らは、旧約聖書に通じ、知的に学び理解を深めていますが、実際には霊的な目である信仰を有することはなく、常に世的な論理に支配されていました。

主イエスは語られます。「わたしの羊ではないからである」。私たちは、神のことを受け入れようとしない人々が滅びるのではないかとの恐れを抱きます。しかし、滅び行く私たちを救い出してくださる主なる神の大いなる御業を見上げなければなりません。

Ⅲ　わたしの羊

そして主イエスは、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」とお語りくださいます。主イエスの声を聞き分けることができる羊には、霊的な目が開かれ主イエスの御言葉を受け入れることができるようにされています。つまりキリスト者は、主イエスのお語りになる御言葉を信仰によって受け入れることができるように、心の目が開かれています。つま

り信仰は、主なる神が内的に働き、主イエスのお語りになる救いの約束を信じることができるようにされます。主イエスの羊であれば、主イエスの御言葉が語られれば、皆がすぐに理解し、主イエスを救い主と信じるようになるかと言えば、そうでもありません。時間がかかる人もいます。私の父は、母が信仰に入ってから四〇年ほどかかり、死を目前にして、初めて救いを理解し、信仰告白をしました。御言葉を理解し、信仰を告白するまでの間、主の御言葉が語られ、聞いていたとしても、心の目である信仰に届いていなかったのです。それまでの長い時間過ごしてきた世的な生活との格闘、戦いがあります。しかし長い時間、主の御言葉に聞き続けることにより、本来あるべき神の子どもとして生きることの本当の喜び、祝福が示され、罪による死に至る生活からの決別へと動かされていきます。

そして信仰の目が開かれ、主による救いが示された者は、神により義と認められ、神の子とされ、清くされ、永遠の命に定められます。そして救いの道を歩むことによる救いをお与えくださった神への感謝と喜びに生きることができます。そして主がお招きくださりつつ、まだ集められていない人々にも同じ喜びに与って頂きたいとの思いが、伝道へとつながります。本当の意味で、救いの喜びにあるからこそ、伝道を行うのです。

「御父の業を行うイエス」

ヨハネによる福音書一〇章三一～三九節

二〇一〇年九月一九日

Ⅰ　ユダヤ人の殺意

主イエスの前に立っているユダヤ人たちは、主イエスを石で打ち殺そうとして、握り拳くらいの大きさの石を手に持っています。彼らの主イエスに対する憎しみは、一過性のものではなく、抑えることのできない憎しみがありました（参照・八章五九節）。この主イエスに対する憎しみの思いが、主イエスを逮捕し十字架に架ける時まで続きます。

　彼らの殺意は、次の主イエスへの言葉に集約できます。「あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ」（三三節）。この時、主イエスの行いは吟味されていません。現在においても、「私がメシアだ。キリストの甦りである」と語る人がいます。私たちキリスト教会は、そういう人たちに対して、彼はキリストではなく、偽キリストであり、異端者であるとの烙印を押します。それは再臨のキリストが誰にでもわかる形で来られるのであり、キリストが再臨することにより、ただちに最後の審判と終末の完成が到来しますが、それらのしるしを、異端者には見つけることができないからです。ユダヤ人たちの目には、私たちが異端者を見るような目で、主イエスの姿が映っています。

Ⅱ　神の御子イエス・キリスト

　つまりユダヤ人たちは、主イエスが「自ら神となった」と語ったと言っているのですが、主イエス御自身は、ずっと「わたしは神の子である」と語られています（三六節）。つまりイエスという人間が神になったのではなく、元々神の子の状態に在り続けている御子が人となられたのです。

　また主イエスは、相前後しますが詩編八二編を引用して語られます（三四～三五節）。詩編にある「神々」（一節・六節）を主イエスは問題とされます。彼らは、イスラエルの民の中にあって、神からの召しが与えられた裁判人でした。人を裁くことは、本来、神に属することです（参照・申命一章一七節）。なぜならば、人は皆、罪人であり、他人を裁くことなどできないからです。主が裁判官をお立てくださり、裁く権能をお与えくださいました。そのことにより、神は教会の秩序、社会の秩序を保つことを求めておられます。このように旧約聖書では、主が召した人々や天使たちに対して「神々」と語ります。

　まして父なる神によって遣わされた救い主、主イエスだからこそ、「自分は神である」、「自分は神の子だ」と言ったとしても、神を冒涜した言葉にはなりません。

　そして主イエスは「聖書が廃れることはありえない」（三五節）とまで語られます。旧約聖書が裁き人、主から遣わされた人々のことを、「神々」と語っているのと同様に、主

から遣わされた神の子である主イエスの言葉にも耳を傾けることが、ユダヤ人に対して、そして私たちに対して求められています。

Ⅲ　救い主を見極める信仰の養い

　主の御前に立たされた私たちは、神から遣わされた天使、神の使い、預言者、主がお立てくださった説教者の言葉を聞くことが求められています。この時、人が語りますが、主の御霊が共に働き、人々の心に神の御言葉が伝えられます。そして、私たちは罪の悔い改めが求められ、信仰が起こされます。だからこそ、ここでユダヤ人たちが、主イエスのことを神の子と信じることがなくても、神から遣わされた者として受け入れ、語られた御言葉に聞く時、自らの姿が露わにされ、罪の悔い改めと信仰の告白へと促されたはずです。しかし現実には、ユダヤ人たちは、自らの罪の姿が露わになることはなく、主イエスを受け入れることができませんでした。

　彼らは「善い業のことで、石で打ち殺すのではない」（三三節）と語っています。しかし主イエスは、「もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう」（三七～三八節）とお語りになります。つまり、主イエスの行われている奇跡・病人の癒しの御業は、一般の人間が行うことのできない御力があり、ここに父なる神の御業が示されています。そうであれば、父なる神が主イエスと共にあること、主イエスが父なる神の内にいることを、あなたたちは知ることになり、悟ることができるのではないかと、主イエスは語られています。

　私たちは、主イエスが再臨される時、偽キリストと区別しなければなりません。インチキではない真の神の御力であること、自己の賞賛のための業ではないこと、旧約聖書から語られている主の神の御言葉と一貫していることなど、私たちは見抜かなければなりません。そのため私たちは、聖書に示されている主イエス・キリストこそが、私たちに与えられた

救い主であることを受け入れ、さらに、再び来られるキリストを見極めることが求められています。そのため私たちは、何が主なる神の御力・御業であり、真理であるかを、常に認識することができるように、常に御言葉の養いを受けつつ、霊的なアンテナを立てておくことが求められています。

「イエスを信じる人々」

ヨハネによる福音書一〇章四〇～四二節

二〇一〇年九月二六日

序

私たちは、日々の生活を送っておりますが、多忙さの故にキリスト者としての原点を見失うことがあります。それは多忙な時だけではなく、試練・苦しみ・悲しみ・虐げなどの時も、同様に時間の流れに組み込まれてしまうのではないでしょうか。

Ｉ　主イエスの目的・十字架と神の民の復活

主イエスが神の御子としてお生まれくださった最大の目的は、御自身が私たち罪人に代わり十字架に架かり、苦しみと死を遂げることでした。すでに主イエスは、御自身が神の御子であることを人々に示し、十字架に架かられる準備も整ったように思います。しかし主イエスには成し遂げなければならない御業が残されていました。

キリストは、神の御子として、御自身が十字架の死から三日目の朝に復活を遂げられるように、キリストが再臨した時に、信じる私たちもまた復活することを約束してくださっています。それは主イエスが命を司られるお方であり、肉体の死を超えて働く御力を持っておられるお方であるからです。そして今までにも主イエスは、人の命を司るお方であることを、病人に癒しによってお示しくださいました。しかしさらに主イエスは、既に死を遂げた者を復活させる御業を通して、御自身の御力をお示しくださいます（一一章）。

Ⅱ　二つのベタニア

つまりヨハネにおいて、主イエス御自身が十字架にお架かりになることと合わせて、主イエスがラザロを復活させる御業は非常に重要です。主イエスは、この重要な御業を行うに先立ち、洗礼者ヨハネによって洗礼を授かった場所、つまりヨルダン川の向こう側（東側）に行かれます（巻末地図六参照）。一章二八節では、ヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であったと記されています。

一一章一節には、ラザロがベタニアの出身であると記されています。これはエルサレムの近郊にある町ベタニアであり、ペレアのベタニアとは別の町です。そこは、主イエスがエルサレムに上られている時に宿泊のために用いられたエルサレムから三ｋｍ程に位置しています。「貧困の家・不幸の家」と訳されるベタニアからベタニアへ主イエスが行かれたことは、聖書が何か意図を込めて語っていると読み取ることもできるかと思います。まさに主イエスが、貧困の民、苦しみの民を助け出す救い主であることを物語っています。

Ⅲ　御業を確認される主イエス

私たちは、主イエスがヨハネから最初に洗礼を授かったヨルダン川の東側に行かれたことに着目しなければなりません。つまり、主イエスはユダヤ人から逃げるようにしてエルサレムの町から出て行き、その足でラザロの所に行き、奇跡を行ったのではありません。

現在に生きる私たちは、効率よく仕事することが求められます。インターネットを駆使して、多くの情報を手に入れ、必要な情報を用いて仕事を行います。しかし、私たちは、日々仕事に追われている時、苦難・艱難・試練にある時、病気で苦しんでいる時、キリスト者として、キリストの十字架による罪の赦しと救いが与えられた喜びにあることを忘れ、目の前に与えられたことを処理することしかできなくなります。こうした時に私たちが求められることが、信仰の原点である御言葉に立ち帰ることです。だからこそ、一週に一度、神の御前に集められ礼拝に集うこと、それに一日に一度、神の御前に頭を垂れ、御言葉に聞く静思の時を持つことが求められています。礼拝に集うことは、その日一日、あるいは

礼拝に集っている間は、日々の働きから離れ、キリストによる罪の赦しと救いにあることを確認することができます。そうすることにより、忙しくても、主の民として主を証しするため、神の国を建て上げるために主によって遣わされていることを覚えつつ、その働きに就くことができます。

　まさに主イエスが、エルサレムから離れ、ヨルダン川の東側に行かれたことは、これから主の大切な働きを行われるにあたって、心を整え、父なる神の御前にその働きをまっとうするための備えを行うために必要なことでした。

Ⅳ　主イエスを信じる人々

　また私たちは、主イエスが改めてベタニアに現れたことを、洗礼者ヨハネが語られた言葉から確認することができます（ヨハネ一章二七節、二九～三〇節）。

　主イエスが再びベタニアに現れた時、人々は主イエスを信じます。洗礼者ヨハネが語った言葉が真実であり、主イエスが御言葉と御業において神の御子であることを示されたからです。エルサレムにおいてユダヤ人は信じることができなかった主イエスを、「貧困の家・不幸の家」であるベタニアの民は福音を受け入れ、神の祝福された民とされました。

　主イエス・キリストは、私たちの罪を赦し、救うために十字架にお架かりくださいました。しかしその救いとは、苦しむ者を助け出し、肉体の死にある者に命を与え、神の国における永遠の喜びと祝福に満たしてくださることです。

「ラザロのためにユダヤに行こう」　ヨハネによる福音書一一章一～一六節

二〇一〇年一〇月三日

Ⅰ　ラザロの家族と主イエス

　ヨハネの読者には、マリアとマルタの名は広まっていました。初代教会の指導者であっ

たのか、それともルカ福音書一〇章三八節以降の記事が知れ渡っていたのでしょう。そして、マリアとマルタに弟ラザロがいたことがここで記されています。ラザロに関しては、ヨハネがこの一一・一二章において記しているだけです。

　しかし福音書は、彼と彼の家族が、主イエスからどれ程愛されていたのかを語ります。主イエスは、逮捕され殺されることから逃れるために、エルサレムからヨルダン川の東側のベタニアに来ておりました。弟子たちは同行したでしょうが、多くの人々がこの事実を知ることはなかったかと思います。なぜなら、主イエスが行く所を多くの人々が知ることは、ユダヤ人たちの追随を許し、主イエスが逮捕されることも考えられるからです。しかし姉妹たちはイエスのもとに人をやります（三節）。つまり彼女たちは、主イエスの逃れた場所を知らされていました。彼ら家族は、主イエスから愛され、主イエスからの信頼が厚かったことを、聖書記者である使徒ヨハネは証ししています。

Ⅱ　病気であるラザロ

　さて、主イエスのもとに届けられた知らせは、ラザロが病気であることでした（三節）。単に病気であれば、数日中にお見舞いに行けば良いとの判断も付くでしょう。だからこそ弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」（一二節）と語ります。しかし主イエスは、ラザロが死に瀕していたことを知っておられます。しかしその上でなお二日間同じ所に滞在されました（六節）。主イエスは愛しておられる友人を見殺しにする冷たい人間なのでしょうか？　しかし主イエスは、ラザロの肉体が死を遂げたことを、誰が見ても明らかにしなければなりませんでした。つまり主イエスがラザロを復活させ、命を与えることができるお方であることを証明するためです。だからこそ、主イエスがラザロの所に行くのは、ラザロが墓に葬られて四日も経ってからだったのです（一七節）。死体が葬られて四日も経てば、遺体は腐り始め、臭い始めます。誰もが、ラザロは死んだことを受け入れざるを得ません。

　一方ラザロを復活させるに先だって、主イエスは弟子たち語られました。「この病気は

死で終わるものではない。神の栄光のためである」（四節）。「この病気」とは、私たちの考える「肉体の死」のことです。「ラザロの病気」と限定しない方が良いでしょう。人は通常、人間が肉体の死を遂げた時、すべてが終わると考えます。だからこそ、人々は「死」を恐れ、「不死」という永遠の命を求め、今の自分・生活を大切にします。しかし、主なる神が創造し、支配しておられる被造物としての人間は、肉体の死をもってすべてが終わることはありません。主が創造してくださった人間とは肉体と共に霊があり、人間は肉体が死を迎えたとしても、霊は生きています。そしてキリストを信じ、キリストにつながる人は、肉体の死の時、霊は天国に受け入れられます。そしてキリストが再臨した時、新しい体が与えられ、霊と結びつき、神の祝福に満たされます。だからこそ、キリスト者にとって肉体の死を迎えることは、それで終わりではなく、病気のように一時的に眠りにつくが、再び起き上がり、天国における永遠の生命の希望の約束があります。

Ⅲ　私たちの救いとキリストの十字架

しかし同時に、人間に与えられる肉体の死と復活は、御子イエス・キリストの十字架の死と復活による罪の贖いなしには語ることはできません（二節）。この記事は、一二章一～八節で記されます。マリアは純粋で非常に高価なナルドの香油を、主イエスの足に塗ります。これは主イエスの葬りのためです（一二章七節）。キリストの十字架の贖いがあったからこそ、本来、罪の故に、死を迎え、永遠の滅びと定められた者が、復活を遂げ、神の国における永遠の生命に与ることができます。つまり、ラザロを復活させるにあたって、主イエスの葬りの準備を行ったマリアのことを書き記すことは、人間に与えられる肉体の死からの復活が、キリストの十字架とつながっていることを指し示すために、重要なことでした。

キリストの愛とは、ラザロを見殺しにすることではありません。肉体の死を遂げても、復活し、永遠の生命の希望を与えることでした。私たちは今、まさに、このキリストの愛の内に命が与えられ、キリストの十字架の贖いに与っています。

「ラザロの死を知るイエス」　ヨハネによる福音書一一章九～一六節

二〇一〇年一〇月一七日

Ⅰ　人の死生観

今日は、主イエスと弟子たちとの語り合いを中心に、人の持っている死生観と、主イエスがお語りくださる生と死に関する教えとの違いを、一緒に考えていきます。

私たちキリスト者は、今の人生を粗末に考えることはしませんが、今の人生がすべてであるとも考えません。しかし神を知らない人たちの中では、今の生がすべてであるとの考え方に立つ人が多いのではないかと思います。主イエスの弟子たちも同じ考えです。ラザロが病気であることを聞いた主イエスはラザロのためにエルサレムに行くことを弟子たちに伝えました。この時、弟子たちは主イエスに答えます。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか」（八節）。イスラエルの民は主イエスを石で打ち殺そうと狙っていました（一〇章三一節）。その思いは日に日に強まっており、主イエスは彼らの手を逃れて、去っておられました（一〇章三九節）。ラザロの町ベタニアは、エルサレムから約三ｋｍの場所です。つまり弟子たちは、イエスがエルサレムに行くことにより、殺され、すべてが終わってしまうと思っています。

Ⅱ　主イエス・キリストの語る生

主イエスのお答えは理解に苦しみます。「昼間に歩いていれば、捕まることはない。そして夜に出歩いた時に捕まるのだ」（九～一〇節）。このように解釈することもできるかもしれません。主イエスは最後の晩餐の後、ゲツセマネの祈りの折に逮捕されました。しかしここでは、主イエスは逮捕の話しをされているのではありません。主イエスは躓きの

話しを行っています。主イエスの語る「つまづき」とは、信仰に関する躓きです。

主イエスが「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」（一一節）と語られる時、主イエスは、肉体の死がすべての終わりになることはないことを語っておられます（参照・一四～一五節）。主イエス・キリストは、人の命を司り、復活させる力を持っておられます。つまり、人は肉体の死を超えて生き続ける魂があり、信じることによって永遠の生命が約束されています。

その上で、主イエスは肉体の死よりも恐ろしいことことして、躓きを語っておられます。つまり躓きとは、世の光であるキリストから離れることです。昼間とは、主イエスを信じ、主イエスの御言葉に聞き従うこと、永遠の生命に与ることであり、夜歩くとは、主イエスから離れ、自分勝手に生きることです。躓きの結果は、永遠の裁きを享受しなければなりません。主イエスを信じ、昼歩いている限り、私たちは滅びにいたることはありません。

使徒ヨハネは、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と福音書を語り始め、主イエス・キリストこそが、世の光、救い主であり、主イエス・キリストにつながり信じることが、救いであり永遠の生命を手に入れることであることを語っています。

Ⅲ キリスト者としての歩み

トマスは「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」（一六節）と語ります。トマスは、ヨハネにおいて重要な局面で登場します。最初は一四章一～六節です。主イエスが、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる」という重要な真理がトマスの問いかけにより語られました。

次に、復活の主イエスが他の弟子たちに現れつつ、トマスの前には現れていない時のことが二〇章二四～二九節で記されています。ここでイエスはトマスに「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」との真理が示されます。

では「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」（一一章一六節）はどうか？トマスは復活の主イエスに出会うまで、真理を理解していませんでした。ですから、ここでトマスは何も理解していません。しかしヨハネは、このトマスの言葉に真理の言葉を込めて語っています。これは集団自決の勧めではありません。しかし肉体の死を迎えても与え続けられる主からの恵みを、トマスは感じ取っています。現在の生に主からの恵みと祝福を覚えつつも、これで終わりではない祝福された永遠の生命があるとの希望があります。だからこそ私たちは、どこまでもキリストと共につながることが求められています。

そして、どこまでもキリストと共に在り続けることにより、時としては迫害・殉教も覚悟しなければなりません。しかし、迫害されることとは、闇の中を歩んでいるようでありますが、実は主による恵みに満たされ、天国の永遠の祝福という光り輝く道です。

「信じる者は死んでも生きる」　ヨハネによる福音書一一章一七～二七節

二〇一〇年一〇月二四日

序

神を知らない人が「信じる者は死んでも生きる」と聞くと驚かれることでしょうが、キリスト者にとっては自明の事です。しかし神を信じ、頭で理解していることが、私たちの本当の信仰となっているのか、今日の御言葉はそのことの問いかけです。

Ⅰ 主イエス、いざエルサレムへ！

ヨルダン川の東側におられた主イエスに、ラザロが病気であることが知らされた時、主イエスはラザロが死んでいる事を知っているにも関わらず、なおもそこに二日間滞在されました。それはラザロが死んだことを他の人々が受け入れる必要があったからです。その後、主イエスはラザロの町ベタニアに向かわれます。ベタニアは、エルサレムから一五ス

タディオン（約三ｋｍ）東に位置し、エルサレムの隣、人々はエルサレムと行き来していた町です。

　主イエスがエルサレムの隣ベタニアに行かれたということは、第一に、主イエスの地上の御生涯の最終段階、つまり十字架にお架かりになるためにエルサレムに入る一歩手前まで来たことを意味します。第二にベタニヤにおいて起こったことは、エルサレムの直ぐ傍で起こったことであり、ユダヤ人たちにとっては、足元から揺るがす重大事件でした（参照・一一章四七節）。つまり、主イエスがラザロを復活させることは、ユダヤ人たちが主イエスを逮捕し、十字架に架けることに拍車をかけたと言っても良いでしょう。

Ⅱ　信仰のリアリティ

　そして、マルタが主イエスの所に来た時、マルタは主イエスに語り（二一～二二節）、主イエスが「あなたの兄弟は復活する」と語られた時にさらに「終わりの日に復活することは存じております」と答えます。マルタの最初の言葉には、最愛なる兄弟ラザロを亡くした悲しみと共に、なぜこの重要な時にイエスがいてくださらなかったのかとの憤りもありますが、主イエスの言葉に対する答えは、マルタの信仰告白です。キリスト者としては模範解答ですが、主イエスはこれで良しとはされませんでした。この言葉から生きた信仰を感じ取ることができないからです。これはキリストの現臨、信仰のリアリティの中に信仰生活を送っているのかという、私たちの問題です。日曜日に礼拝に出ていればキリスト者なのか？　聖書の知識・教理を蓄えれば、良いキリスト者なのか？　決してそうではありません。キリストの命、永遠の生命の喜びに生きているかが問われています。

　マルタの信仰告白は、ファリサイ人でも行う事ができました。つまりサドカイ派は死人の復活を否定していましたが、ファリサイ派は死人の復活を信じていたからです（参照・マタイ二二章二三～三三節、使徒二三章六～一一節）。そして彼らもまた、約束のメシアの到来と終末の時代に訪れる復活を信じていました。しかしファリサイ人たちは、律法主義に陥り、主イエスの語られる真理に耳を傾けることができなくなっていました。彼らの

信仰は、頭の中に留まり、生きた信仰となっていませんでした。ただ、ファリサイ人たちとマルタの間に違いがあったとすれば、主イエスを受け入れていたか、受け入れていないかの違いです。

　マルタの前に立っておられるのは、主によって遣わされたキリストです。主なる神はどういうお方であったのか？　主はモーセに対して、「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト三章一四節）とお語りになりました。主なる神は、昔の時点でも、その時におられ、今、私たちと共におられ、そして未来にあっても、その時に神は私たちと共にいてくださいます。生きて働く主なる神が、常に私たちと共にいてくださいます。

　今、生きて働く主なる神である御子イエス・キリストが、マルタと共にいてくださいます。そのお方が、「あなたの兄弟は復活する」とお語りくださいました。ここで今、主が兄弟を復活させてくださる信仰が求められています。

　そもそも人は、主から創造された時に、命の息吹が吹き入れられたのですが、最初の人の罪により、死が持ち込まれました。主は人に「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創世記二章一六節）と語られており、人はこの木の実を食べたのです。この時、人はすぐに肉においては死ぬことはありませんでしたが、神の子として永遠の生命の喜びから離され、死んでいたのも同然でした。この死んだも同然の者の子として、私たちは生きてきました。生まれながらに死んだも同然の者です。

　しかし主イエスは、「あなたの兄弟は復活する」（二三節）とお語りくださいます。これは肉の命の復活ですが、同時に死に定められた者に与えられた永遠の生命です。そしてこの主イエスが、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬ事はない」（二五～二六節）とお語りくださいます。復活、これは確かに、キリストの再臨、神の国の完成まで待たなければなりません。しかし、死に約束されて、希望を失っていた私たちに、キリストは命を与え、「死ぬもの」ではなく「生きる者」、命をお与えくださいます。

マルタは、今、キリストによって示された命を受け入れるのかと問われています。永遠の生命とは、肉の死を遂げた後、終末に与えられる遠い話しではありません。今、マルタに、そして私たち一人ひとりに与えられている永遠の生命です。この永遠の生命に入れてくださるために、キリストは十字架に架かり、私たちの死の贖いとなってくださいました。私たちは、頭でっかちの知識としての信仰に留まっていてはなりません。私たちは、すでに与えられた永遠の命の喜びに満たされています。

「主イエスの憤り」

ヨハネによる福音書一一章二八～三七節

二〇一〇年一一月七日

Ⅰ　死に直面する人々

マルタとマリアの兄弟ラザロは墓に葬られてからすでに四日経っていました（一七節）。誰の目から見ても、ラザロは死に、生き返る希望が失せていました。それはマリア（三二節）もマルタ（二一節）も同様です。これは死を遂げた人間は息を吹き返すことはないという諦めです。そして彼らは、主イエスでも死を克服できないと思っています。言い換えれば、マリアが主イエスを救い主として信じていている信仰は限定的であり、主イエスが全知全能なる神であることを、受け入れ信じることができていませんでした。

Ⅱ　主イエスの愛

しかしこの時イエスは、心に憤りを覚え、興奮されます（三三節）。「心」とは「霊」です。霊、つまり魂に激しい憤りを覚えられ、心がかき乱されるような興奮状態になられました。神は、感情もなく、興奮することもないように思っている方もおられますが、そうではありません。主なる神は、父・子・聖霊の豊かな交わりの中にあります。そして聖書においては、繰り返し、神の感情が語られています。出エジプト三章では、エジプトに

おいて奴隷の民であったイスラエルの痛みを主は覚えられます。出エジプト記三二章の金の子牛の場面では、主なる神が激しい怒りの感情を表され、その上でモーセがなだめます。

では、ここで主イエスは何に対して、これだけの感情を露わにされているのでしょうか？　マルタとマリアの不信仰でしょうか？　主イエスは弟子たちの不信仰に、憤りを露わにされるお方ではありません。主イエスはペトロが離反した時も、トマスが復活を受け入れなかった時も、温かく見守っていてくださいます。ここでも、主イエスは彼女たちの悲しみ、心の痛みを受け止められ、信仰の弱さを受け止めていてくださっています。特に親しい者が死に、悲しみにある人々に対して、悲しみに追い打ちするようなことはなさいません。

主イエスの怒りはユダヤ人たちに向けられていると語る神学者がいます。それにはいくつかの理由があります。二八節でマルタがマリアを呼びに行った時、日本語訳聖書では翻訳されていませんが、「密かに」という言葉が原典のギリシャ語では記されています。つまり主イエスは、主イエスの語られることを理解できないユダヤ人たちに来てもらいたくないとの意図はありました。そしてマリアが主イエスの前で悲しみを訴えている時、彼女が泣いていると、一緒にユダヤ人たちも泣いていた様子を主イエスは見ておられました。彼らの演技、偽善的な行為に対する主イエスの怒りと考えます。しかし主イエスは、主イエスを受け入れることができないユダヤ人に対してすらも、これだけの憤りの感情を露わにされる方ではありません。それは主イエスが十字架に架かっておられる時に、十字架に架けたユダヤ人に対する主イエスの祈りによって明らかです。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ二三章三四節）。主イエスを拒絶し、受け入れることのできない人々に対しても、主はなおも執り成しの祈りをしてくださいます。

Ⅲ　主イエスの憤り

主イエスの憤りは、ラザロを追いやった「死」に対してです。主は、人を作られた時、

神のかたどり、神にかたどって人を創造されました（創世記一章二七節）。そして命の息を吹き入れてくださいました（創世記二章七節）。つまり人は、主なる神と交わり、神と共に永遠に生きるものでした。そこに「死」が持ち込まれました。「死」は主が望んでおられるものではありませんでした。「死」は持ち込まれるべきものではありません。しかし、神の子として主との交わりに生きるべき人に、罪が混入し、死が持ち込まれました。

つまり主イエスの憤りは、愛するラザロが、死を遂げたからです。そして主イエスは、御自身の憤りを抑えるが如く、二つの行動を行います。第一が実際に、肉の死を遂げたラザロの所に行き、ラザロを復活させることです。この御業は、人々に対しては主イエス御自身が、肉の死に打ち勝つ力を持っておられることを示されることですが、同時に、主なる神は、愛する神の子として定められている人に対しては、「死」ではなく「命」をお与えくださるお方であることを、はっきりと私たちに示しくださっています。

主イエスの第二の御業は、根源的に人間を支配している「死」に勝利をされるべく、御自身が十字架に道を歩まれることです。ヨハネは一二章になると、過越祭（主イエスが逮捕され、十字架に架けられる時）の六日前になります。ラザロの復活はその直前に行われました。私たちが避けることができない肉の死を主イエス御自身も十字架で遂げてくださいました。そして陰府に留まられました。そして主イエスは、三日目の朝に復活し、甦られました。つまりラザロに起こった復活の御業は、ラザロ一人に留まることなく、主イエスを信じ、主イエスにつながるすべての人に対しても同じ復活が与えられることをお示しくださっています。そして主イエスはご自身が復活することにより、「死」に勝利されました。主の勝利、主の復活は、ラザロを死から命を与えられたように、私たちを死の世界から神の子としての命の世界へと招き上げてくださることを指し示しています。

私たちはこの後、主の晩餐の礼典に招かれます。私たちはまさに、この聖餐の礼典により、私たちのために十字架に架かられた主イエスのお姿を思い描くように、同時に、私たちに与えられた命により、私たちは、天において行われる主の晩餐に招かれていることを

忘れてはなりません。イエス・キリストを救い主として信じる私たちは、主イエスが激しい憤りを覚え、興奮された「死」の世界から、神の国における恵みと平安に充ちた祝福された命の世界に入れられています。

「主イエスの憤り」　ヨハネによる福音書一一章三八～四四節

二〇一〇年一一月二八日

Ⅰ　肉の死

ヨハネ一一章では、マルタとマリアの兄弟ラザロが死に、墓に葬られてきたこと、主イエスがラザロの墓の前に来た時、ラザロが葬られてからすでに四日経っていたことが記されています。死後一・二日であれば、仮死状態から蘇生することが考えられるかも知れませんが、三・四日となると死体が腐乱して臭いだします。聖書が「四日もたっている」（一七、三九節）と記すのは、蘇生の希望をなくしたことを強調して記しています。

ラザロの死を語るマルタは、主イエスに対して「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」と告白していました（二五～二七節）。私たちもマルタと同じように、主イエスに対する信仰を告白しているキリスト者です。しかし現実に親しい者が肉の死を遂げた時、私たちも復活の主であるキリストによる復活の希望を覚えつつも、今まで一緒に暮らしてきた肉親の死に対して、悲しみがこみ上げてきます。

Ⅱ　人の死とキリストの十字架

主イエスは、ラザロの墓に来られた時、再び心に憤りを覚えられます（一度目は三三節）。主イエスの激しい感情は、人が避けて通ることのできない死に対して向けられています。

主イエスがなぜ二〇〇〇年前のクリスマスの夜に、人としてお生まれになられたのか？

それは主イエス御自身が十字架の死と復活を通して、主イエスを信じるすべての人に罪の赦しと永遠の生命を与えるためです。主なる神は人が罪の故に死に行く姿に対して激しい憤りを持っておられます。だからこそ父なる神は、永遠のご計画の中、愛する御子イエス・キリストを救い主として、人としてこの世に遣わされたのです。つまり、主イエスの憤りは、父なる神の憤りそのものです。

そして主イエス・キリストの十字架の死は、まさにこの憤りの矛先である死に対して、罪に対して、そしてサタンに対して勝利をもたらすことが目的でした。十字架こそ、主イエスにとって避けて通ることのできない重要な御業でした。だからこそ人間イエスは、死の苦しみを知る余り、逮捕され十字架に架けられる前ゲッセマネにおいて「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」（ルカ二二章四二節）と祈りつつ、御自身が与えられた最大の使命をまっとうするために、逮捕され十字架に架かられる道を歩まれました。つまり今、人の死に対して主イエスの持っておられる憤り、父なる神の持っておられる憤りは、御子イエス・キリストが十字架に架かることによってのみ取り除けることが可能です。キリストの十字架の死と死から復活こそが、主イエス御自身の憤りにある私たちの死を取り除けられる唯一の方法であり、このことは主イエス・キリストを救い主と信じる者に与えられる祝福です。

Ⅲ　復活により示される神の栄光

そして主イエスはマルタに対して、「もし信じるなら、神の栄光が見られる」と宣言されます。救いとは、神によって与えられ、神の国に入れられることであり、神の栄光の中に入れられることです。神の御支配は、この世、つまり全世界に渡っています（参照・詩編一九編）。しかし私たちを覆っている罪により、私たち人間は神の栄光を、自然をとおして直接見ることができなくなりました。救いはこの神の栄光の回復です。だからこそ私

たちが主イエスこそが神の御子メシアであることを受け入れ、救いの御業を成し遂げるお方であることを信じる時、神の栄光を見ることができる者とされます。

主イエスは「ラザロ、出て来なさい」との大声の呼びかけ、ラザロは復活します。これは主イエスの喜びの叫びです。そして主イエスご自身も、十字架の死から三日目の朝に、罪に打ち勝ち、復活を遂げられます。同じように、キリストを受け入れ信じる私たちもまた、キリストの十字架により義と認められ、キリストによる最後の審判において無罪判決を受け、神の国の永遠の生命に与ります。この神の御国は、まさに神の栄光が満ち溢れています。

しかし多くの人々は、この神の栄光を見ることができずにいます。神の存在・御業・栄光を直接目で見なければ信じないと語る人が多くいます。彼らには今は隠されています。隠されていても、神は現実に存在され、神の御業は今も私たちに示されています。それを信じることができないのは、罪があるからです。この心の頑なさと取り除くためには、神の御言葉が宣べ伝えられ、同時に聖霊が働いています。

「イエスを恐れるユダヤ人」　ヨハネによる福音書一一章四五～五三節

二〇一〇年一二月五日

Ⅰ　群集心理

ラザロは死んで葬られてから四日経った時、主イエスは彼の墓に来られ、ラザロを甦らせました。この死者を復活させる主イエスの御業は、新約聖書を通しても、主イエス御自身が十字架の死から復活を遂げられることに並ぶ、偉大な御業です。だからこそ、それを見ていたユダヤ人たちも主イエスを信じます。しかし、ここで彼らの言葉は一言も記されていません。もちろんこの中には、このまま主イエスを信じて、救いの道を歩み続けた人

たちもいたことでしょう。しかし、それはごく一部の人だったことでしょう。

ここに出てくる人々は、いわゆる群衆です。「群集心理」という言葉があります。「群集心理」は「群衆の状態におかれた人々が示す特殊な心的状況であり、暗示されやすく、衝動的な言動をとる傾向があ」り、一般に判断力が低下し、興奮性が強くなり、衝動的・無責任的な言動をとる傾向にあります。

なぜ彼らが群衆にすぎなかったと言えるのか？　この時、過越祭の六日前です（一二章一節）。過越祭の日に主イエスは十字架に架けられ死を遂げられます。つまり一週間後、逮捕され裁判を受けているイエスに、人々は「十字架に架けよ」と叫びます。人々の思いは一週間で、「主イエスを信じる」ことから、「イエスを殺す」方向へと変わります。つまり人々は自分の意志によって考え、行動しておらず、大成に流されるまま行動していました。「世論」は力を持ちますが、しかし何も考えずに世論に流されるままでいると、大きな過ちを犯します。私たちは主イエスを信じることにおいて、群衆であってはなりません。

Ⅱ　ファリサイ人たちの恐れ

一方、主イエスがラザロを復活させたことを聞き知ったファリサイ人たちはどうでしょうか？　すぐさま最高法院（サンヘドリン）を招集し開催します。つまりファリサイ人たちにとっても、イエスが死人を復活させたことは衝撃的な出来事でした。

彼らも、主イエスの御業を受け入れざるを得ません。彼らは語ります。「われわれは何をしているのか。あの人が多くのしるしを行っているというのに」（四七節・新改訳）。つまりファリサイ人たちは「どうすればよいのか」と手をこまねいていますが、実際には何もできず、さじを投げている状態です。別の見方をすれば、彼らは主イエスが奇跡を行うことのできるお方として、神から遣わされた方であることを受け入れられないばかりか、本来ならば自分たちがそのような御業を行わなければならないとの立場に立っています。「そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」（四八節）。

これは非常に滑稽な表現です。救い主を待ち望む神の選びの民とされたイスラエルです。そして神殿は、主なる神が臨在される場所として、神礼拝を献げる場として、主から賜った聖なる場所です。イスラエル人であれば、約束の救い主メシアが確実に来られることを信じ、またそのことを人々に語り継いでいたはずです。彼らが「我々の神殿も国民も滅びてしまう」と語ることは矛盾です。彼らは、バビロン捕囚で神殿を占領され、神の約束の地を追われた過去がありました。トラウマがあったことでしょう。しかし主が約束の民を捕囚の民としたのには意味があり、彼らはその意味を知らなければならない立場にありました。主はイスラエルに罪に対する裁きを示された上で、イスラエルに残りの民をお与えくださり、エルサレムに帰還し、神殿を再建してメシアを待ち望むことを求めておられました。

つまり、「我々の神殿も国民も滅びる」と語るのは、自分たちの信じているはずの約束のメシアの存在を否定しており、信仰の矛盾です。つまり彼らは約束のメシアを待ち望むと語りつつ、実際には、自分たちの地位・権力・土地に固執しています。だからこそ、イエスの御業により、ローマの命令で失脚させられることを恐れます。

Ⅲ　主イエスを見よ

では、私たちは、どうのように神を信じればよいのでしょうか？　人々の意見に左右されることなく、自分の信仰を確立することです。「〇〇先生が語るから正しい。信じる」ではいけません。それは〇〇先生の僕であって主の僕ではありません。私たちが従わなければならないのは、創造主・救い主である主なる神です。だからこそ、群集心理に陥り、盲目的信仰となってはなりません。

私たちは主イエス・キリストに聞き従うことです。主イエスは、墓に葬られて四日経っていたラザロを甦らされさせたことを聖書は証しします。そしてその事実を多くの者たちが認めています。私たちはこの主イエスの御業を受け入れ、信じることが求められています。そして、このお方が神の御子であり、今も生きて私たちと共にいてくださるインマヌエル

であることを覚える時、主イエスが私たちを復活させることのお出来になるお方であることを受け入れることができます。そして、変わる事のないお方を受け入れるのですから、私たちの信仰も、変わる事があってはなりません。信仰は、人々の意見に流されたり、一時の感情であってはなりません。私たちは今、主の晩餐に与ります。天国における主の晩餐に招かれていることを、今、確認します。だからこそ私たちは、人の意見に左右されることなく、救い主である主なる神、贖い主である神の御子、主イエス・キリストを信じ続けていかなければなりません。

「民に代わって死ぬイエス」　ヨハネによる福音書一一章四五～五三節

二〇一〇年一二月一二日

序

キリストの十字架の死は、私たちの救いのための贖い、つまり身代わりの死です。他人の罪を代わりに背負い、特に死に至る贖いなど私たちには考えられないことです。しかし神の御子イエス・キリストは私たちの贖いのために十字架にお架かりくださいました。このキリストの十字架の御業は、旧約聖書において預言がされており、主の大いなるご計画によって行われました。生きて働かれる主なる神が、私たち人間を愛してくださり、神の救いのご計画に、私たちを引き入れてくださいます。しかしキリストの十字架は、同時にユダヤ人の罪の表れであることも、私たちは確認していかなければなりません。

Ⅰ　世俗化した宗教的為政者

さて、主イエスが死んでいたラザロを復活させたことは、ファリサイ人たちにとっても衝撃的な出来事でした。彼らはすでにイエスを殺そうと企んでいました。しかし、主イエスがラザロを復活させ、多くのユダヤ人たちが主イエスを信じるようになり、危機を覚え

ます。それればかりか「ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」（四八節）と語り始めます。神を信じて、メシアを待ち望みつつ、人間的な力による滅びがもたらされることに脅える信仰的矛盾がここにあります。つまり彼らにとって大切なことは、自分たちの地位が保たれることです。彼らの脅えは、イエスが人々に賞賛される事により、ローマが自分たちの地位を奪うこと、さらにローマがイスラエルを完全に征服し、イスラエルを滅ぼしてしまうことです。

ここで大祭司カイアファが語り始めます。大祭司は本来、レビ族の家系で、一度大祭司に任じられると、生涯その地位にありました。しかしこの時代、大祭司の地位は世俗化し、ローマによって任じられおり、ローマの総督によって途中で交代させられることもありました。そのため大祭司は、ファリサイ派には属さず、より現実主義であるサドカイ派に属し、死人の復活すら信じていませんでした。また、長老たちによって構成されていた議会、最高法院に大祭司が加わり、大祭司が議長を務めていました。神と民に仕える聖職者が世俗化する、このことは非常に大きな問題があります。

Ⅱ　大祭司カイアファ

カイアファは「あなたがたは何も分かっていない」と発言します。これは議会の大成を占めていたファリサイ人に語った言葉です。カイアファはイエスに脅える事は致しません。五〇節の言葉は非常に政治的な言葉です。ここに彼の信仰を感じることはありません。

しかし主なる神が求めておられることは、残りの一人を大切にすることです。一〇〇匹の羊の譬えが物語っています（ルカ一五章一～七節）。弱者であり、切り捨てられても当然と思われる人であっても、主は最後まで探し求め、神の民として救いに導いてくださいます。主は私たちのことを思い、苦しみを受け止め、私たちの弱さを一緒に担ってくださいます。

Ⅲ　主のご計画

ここで福音書記者ヨハネは、五一節を付け加えます。つまり私たちは、ここに神の御計

画が実現していることを読み取らなければなりません。神の御計画の実現であったからこそ、ここに我々の救いの確かさを見ることができます。カイアファは確かに自分から語りました。ここに彼のよこしまな心、彼の考えが表れています。しかし人の計画が実行されていくのにあたって、同時に神の御計画がここにあります。この神の御計画がカイアファによって預言されました。彼は知らないながらに神の真理を語ります。つまり主なる神は、すべてを支配しておられ、私たちの意志を用いつつ、私たちの意志を超えて御自身の御業を成し遂げることがおできになります。つまり一〇〇％彼の言葉ですが、同時に一〇〇％神によって預言が語られました。

さらにヨハネは五二節を語ります。国民とはイスラエルの民であり、散らされている神の子たちとは、世界に散らされている選びの民、福音の宣教を通じて起こされ、召し出され、集められる人たちのことです。大祭司カイアファにとって、イエスの死は、単なる一人の死に過ぎません。しかし主は、一つの小さな出来事を通して、全世界にいるすべての神の民の救いを成し遂げてくださいます。キリストの御降誕と十字架・復活により、キリストを信じる私たちは罪が贖われ、神の民とされて、永遠の生命の約束が与えられています。主の大いなる御業を顧み、救いの感謝と喜びをもって、クリスマスを迎えましょう。

「イエスを狙うユダヤ人」　ヨハネによる福音書一一章五四～五七節

二〇一一年一月九日

序

ヨハネによる福音書は、今日与えられました御言葉から新たな展開を迎えます。今まで主イエスは主の御業を行われ御自身が神の御子・救い主であることを宣べ伝えていました。そして今日の所から、主イエスは十字架への道へと進んで行かれます。

I　ユダヤ人

一つの事件があると加害者と被害者があり、加害者には加害者の言い分があり、被害者には痛みが伴います。裁判となれば、それぞれを客観的に評価して、判決がくだされていくこととなります。主イエスの十字架を見ていく時にも、同様のことを考えていかなければなりません。つまり一方は、神の御子である主イエスが十字架に架けられることの意味です。もう一方は、主イエスを十字架に架けたユダヤ人の罪です。

ユダヤ人たちは、前々から主イエスを殺そうと企んでいました（ヨハネ五章一八節、七章一節、八章四〇節、一〇章三一節）。さらに一一章五三節でも語ります。しかし今回は今までとは異なります。今まではユダヤ人一人ひとり、個人としてイエスのことを憎み、殺そうと思っていましたが、会議などで決議したものではありませんでした。しかし五三節は、最高法院（四七節）における決議です。もちろん、会議においてすべてのユダヤ人が一致して賛成していたのではありません。事実、主イエスが十字架で死を遂げられた時、遺体を引き取り、墓に葬ったのは、最高法院の議員の一人ヨセフであったことが記されています（ルカ二三章五〇～五三節）。

しかし信仰上のことを取り扱う会議において、罪のない者を十字架に架ける決議を行うことは重大な罪です。私たちも教会会議を行います。私たち改革派教会であり、牧師と長老によって行われます小会で決議していきます。会員の皆様は会員総会において、牧師・長老を選出することにおいて会議に参加します。主によって立てられた牧師・長老は、会議において主の御前に立ち、自らの判断ではなく、主がこの教会において何を求めておられるかを主に委ねながら決議を行っていきます。しかし、牧師・長老であっても、罪赦された罪人であり、誤った決議を行うこともあります。教会の歴史はそれを物語っています。戦時中の日本の教会も、戦争に協力し、周辺諸国の人々を苦しめ、偶像崇拝をした罪があります。ウェストミンスター信仰告白三〇章四節「使徒時代以来のすべての総会議あるいは大会議は、全体的なものであれ、特定のものであれ、誤りを犯し得るし、実際多くの会

議が誤りを犯してきた。それゆえそれらは信仰や実践の規範とされてはならない。むしろその両者における助けとして用いられるべきである」。

私たちがここで求められる第一のことは、決議を行うにあたって主の御前に遜り、何が正しいか御言葉をもって判断することです。周囲の人々の考えに流されてはいけません。第二に、罪のないお方を殺すことを求めた者はもちろん、大勢に流されてしまう者、さらには声を出すことすらできない者にもその責任はあります。そして私たちもまた、彼らと同じ罪を担っています。罪の刑罰は死です。だからこそ私たちは、常に主の御前に立ち、自らの行動、言葉、心を吟味しなければなりません。

Ⅱ　神の小羊イエス・キリスト

一方、十字架に架かろうとされている主イエスはどうでしょうか？主イエスはユダヤ人から逃げ回っているように読むこともできるかと思います（五四節）。しかし主イエスは逃げ回られたのではなく、十字架に架けられる時は定められていました。この時は過越祭の六日前です（一二章一節）。キリストは、私たちの罪を贖い、死を遂げるために、神であるお方が人としてお生まれになられました。キリストが死を遂げる時は過越祭です。過越祭とは、旧約の時代、エジプトに奴隷とされていたイスラエルを、主なる神がモーセを立てて救い出してくださった時を記念して定められた祭りです。

過越祭では、毎年、生け贄を献げます。それはイスラエルが神の裁きから逃れたことを単に覚えるだけでなく、イスラエルの民は、自分たちもまた神の救いにあることを確認しました。しかしそれはあくまで約束であり、救いの成就は神の御子が生け贄をして献げられることを待たなければなりませんでした。だからこそ旧約のイスラエルの民は、約束のメシアを待ち望んでいました。そしてイエス・キリストが献げられることにより、救いは完成します。キリストの贖いは、この十字架一回限りであり、旧約に生きたイスラエル人も、この当時の弟子たちも、そして今に生きる私たちも、このキリストの十字架によって救いが完成します。

本当ならば私たちが十字架を背負って死ななければならなかった所を、主イエス・キリストが私たちの十字架を身代わりに背負ってくださいました。そのことにより、主イエスを救い主として信じる者の罪は贖われ、神との和解が与えられ、神の子として、永遠の生命が与えられます。

そしてイエス・キリストを真の神、真の救い主と信じる者は、キリストが十字架の死から三日目の朝に、死に打ち勝ち復活を遂げてくださったように、復活の命が与えられます。キリストが再臨される時まで待たなければなりません。しかし、主によって与えられる救いは、復活の生命と共に、神の国における永遠の祝福された生命です。

「イエスを葬る準備」　ヨハネによる福音書一二章一～八節

二〇一一年一月二三日

序

私たちの教会の今年の標語は「支え合う教会」です。私たちは神の救いの民として、十戒の第二の板に表されている隣人に対する愛を表していくことを目指しています。しかし同時に、私たちは十戒の第一の板に表されています救い主である主なる神に対する愛を表さなければならないことを、今日与えられた御言葉から聞かなければなりません。

Ⅰ　主イエスの十字架への道

主イエスはいよいよ十字架に架かられるためにエルサレムに上られます（一二節）。この時、主イエスは十字架をしっかり見据えておりました。どれだけの緊張の中にあったことでしょう。そうした中、主イエスはベタニアのラザロの家を訪れます。主イエスはラザロを死から復活させましたが（一一章）、それは御自身の十字架の死と復活において、主を信じるすべての者が復活を遂げることを私たちに示してくださるためでした。

Ⅱ　主イエス、香油を注がれる

そのためラザロとその姉妹たちにとっては、主イエスが来られることにより喜びで満たされていたのではないでしょうか。ここで姉のマルタは給仕をしております。旅人をもてなすことは当然のことですが、この時の食事は特に弟ラザロを甦らせてくださった主イエスに対するおもてなしであり、感謝と喜びをもって行われていたことでしょう。

一方妹マリアは、主イエスの前に跪き、主イエスの足にナルドの香油を塗り始めます。ルカ福音書一〇章三八～四二節には、主イエスがマルタとマリアの家に向かえられたことが記されています。ここでもマルタは主イエスのために給仕をしており、マリアは主イエスの前に座り主イエスの御言葉に聞き入っていました。この時、主イエスはマルタに対して語られました。「主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない』」（一〇章四一～四二節）。神を信じた信仰に生きようとする時、隣人に対する愛の業・奉仕は第一のことではありません。第一に救い主である主なる神に愛されている者として、主なる神への愛を表し、御言葉に聞き、主を礼拝することが求められています。その上で兄弟愛に生きることとして奉仕があります。マリアはそのことを理解した上で主イエスの御言葉に聞いていましたが、マルタは第一のことが疎かになっていました。

今日与えられたヨハネによる福音書の御言葉においても、マリアはラザロを甦らせてくださった救い主イエス・キリストが今何を求めておられるのかを第一のこととして思っています。つまり主イエスは、ラザロを復活させ、「良かった、一緒に喜ぼう」と祝宴を求めているのではありません。むしろ主イエスの思いは、これから起ころうとしている御自身の逮捕と十字架を見据えています。弟子たちを初め、周囲の人たちは主イエスのこの思いを知ろうとはしなかったのですが、マリアは主イエス・キリストを御覧になり、死の葬りの準備を行います。

Ⅲ　主に従い行く

そしてマリアはナルドの香油を取り出し主イエスに塗られます。ナルドの香油とはどういったものであったのでしょうか？　雅歌にもナルドが出て来ますが（一章一二節、四章一三節，一四節）、男女の恋の中において、人の心に真の喜びと満足を与えるものとして登場します。しかしナルドの香油は死者を葬る時にも用いられていました。地上の生涯を終えた者が、なおも主の祝福の内にあることを覚えるために用いられたのではないでしょうか。そもそもナルドの香油とは、カンショウコウ（甘松香）というインドやヒマラヤ地方で栽培される植物の根から調製され、非常に高価でした。イスカリオテのユダの言葉で、三〇〇デナリオンで売れるとありますから（五節）、普通の人が働いて得る一年分の給与に相当します。通常は、数滴もちいるのですが、マリアはそれを惜しみもなくすべて用いました。マリアが惜しみなくナルドの香油を主イエスに注いだのは、主イエスが十字架において死に行くということの意味をしっかりと理解していたからです。

私たちはこのマリアの行為にも注目しなければなりません。当時、人々が客を家に招き入れる時、汚れた足を水で洗い落とすことを行っていました。それは奴隷や身分の低い者の行うことです。洗礼者ヨハネが主イエスに対して、「わたしはその履物のひもを解く資格もない」（ヨハネ一章二七節）と語ることにより、主イエスが真の神の御子であり、自分とは比べることなどできないことを語っていました。しかしマリアは、この主イエスの足を高価な香油で洗うばかりか、自分の髪でその足をぬぐいました。主イエス・キリストを救い主に相応しい葬りの準備を行うと同時に、主の御前に立つ自らの姿を明らかに致します。つまり、マリアは主イエスの御前に立った時、主イエスの一人の僕であり、主イエスに対して完全に服従し、仕えることを怠りませんでした。

私たちは、今年、祈りと献身をもて「支え合う教会」を目指していくのですが、主イエス・キリストの十字架への道をはっきりと見据え、御言葉に仕え、奉仕するマリアの姿を忘れてはなりません。奉仕すること、献金することが第一になってはなりません。何より

も私たちが第一にしなければならないことは、私たちを救いに導いてくださった主イエス・キリストを見据え、主イエス・キリストの十字架と死からの復活を確認することです。そのことから、主なる神を礼拝することへと促され、主によって与えられた愛の感謝が、隣人に対する愛へとつながっていきます。だからこそ、私たちは、この年も、第一のことを第一として、日々、歩み続けていかなければなりません。

「イスカリオテのユダ」　ヨハネによる福音書一二章一～八節

二〇一一年一月三〇日

Ⅰ　マリアと弟子たち

　主イエスは十字架に架かられることを覚えつつ、ベタニアにおいて食卓に着いておられ、その傍らでマリアによって葬りの準備が行われます。これは喜びに満ちた晩餐であり、その時、マリアが行った行為により、部屋中は芳しい空気が漂っていました。

　しかし弟子たちは、主イエスの心を理解できず、またマリアの行った行動を是認することができません。それは決してここで記されているイスカリオテのユダばかりか、他の弟子たちも同様です（マタイ二六章八節、マルコ一四章四節）。私たちもこの場に居合わせたならば、イスカリオテのユダの言ったようなことを考えるのではないでしょうか。

Ⅱ　イスカリオテのユダ

　ヨハネによる福音書は、イスカリオテのユダに注目します。ユダは、主イエスが十字架に架かられるきっかけとなります逮捕の場面で、ユダヤ人を先導した者として、福音書は語ります。ヨハネによる福音書は、一三章二一節で主イエスがユダの裏切りを予告するにあたり、一二章四節、一三章二節、一三章一一節と三度に渡ってユダが裏切り者であることを指摘します。

　私たちは聖書を繰り返し読み、イスカリオテのユダは裏切り者であり、「あいつは悪い奴だ」と考えがちです。しかし主イエスの一二使徒の中で、彼の位置を確認しなければなりません。ペトロやアンデレたちは漁師でした。またマタイは徴税人であり、シモンは熱心党員でした。そうした中、イスカリオテのユダは主イエスから会計を預かっていました。会計処理を行うのは、能力と周囲からの信頼も必要です。主イエスは徴税人マタイではなく、イスカリオテのユダに会計を委ねていました。彼は主イエスの弟子たちの中にあっても、主イエスからも他の弟子たちからも信頼されていた人物であったのではないでしょうか。ですから私たちは、彼が特別、悪人であったとの思いは捨てなければなりません。

　ユダはパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入ったため（一三章二六節）、主イエスを裏切る行為をします。しかしヨハネによる福音書は、その伏線として彼が盗人であったことを明らかにします。つまり彼はサタンが入ったから主イエスを裏切ったのであり、彼もまた被害者であるといった同情心をもつことも誤りであると言わなければなりません。

　会計を預かる者は責任が伴い、また大きな誘惑も隣り合わせです。だからこそ会計に関わる事件・事故は教会においても繰り返されます。私たちは罪が赦されたといえども、なおも罪人であるからです。だからこそ教会は罪が混入しないシステムを作らなければなりません。それが会計監査であり、監査も責任をもって行うことが求められます。

　つまりイスカリオテのユダが主イエスを裏切る罪を犯したのは、彼にサタンを受け入れやすい状況を作っていたからです。だからこそ私たちも周囲にある様々な誘惑に対して、「これくらい大丈夫だ」との過信は禁物です。常に主の御前に立ち、主の御言葉に聞きつつ、サタンが入ってくる隙を作らないことに日々努めなければなりません。

Ⅲ　主イエスの葬りと貧しい者

　最後にイスカリオテのユダが「なぜ、この香油を三〇〇デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」（五節）と語った御言葉に聞きます。私たちは今年「支え合う教会を目指して」として、ディアコニア（執事活動）を覚えています。こうした活動は、今

年一生懸命に行えば、それでよいのではありません。むしろ献げることができるものは限られていますが、継続的に長く援助し、祈り続けることが求められます。同時に、援助を求めている団体は数え切れない位あります。ですから金額は少なくても、なるべく多くの団体のことを覚えて祈り、援助を行っていこうと思います。

　イスカリオテのユダが語った言葉は、人々に同意を与えるかも知れません。しかし私たちは誤ってはなりません。前回、第一のことを第一にしなければならないことを語りました。つまり隣人を愛する者として、一生懸命に奉仕し、援助することも大切ですが、それが目的化してはダメであり、主なる神による罪の赦しと救いが与えられている者として、神を愛し、神に感謝をもって礼拝することが第一でなければなりません。キリストの十字架抜きに私たちの救いはありません。だからこそこの時マリアは、主イエスが十字架に架けられ、死を遂げられるに先立ち、葬りの準備を第一のこととして選び、行いました。私たちにとっても同様です。第一のことを第一にし、神を礼拝すること、伝道することのために必要な費用はないがしろにすることなく、同時に主への感謝と喜びをもって、隣人のことを覚え、祈り、献げ、奉仕を行っていかねばなりません。

「イスラエルの王」　ヨハネによる福音書一二章九～一九節

二〇一一年二月六日

Ⅰ　群衆による歓迎

いよいよ主イエスがエルサレムに入られます。過越祭の五日前、つまり主イエスが十字架に架けられるその日が過越祭ですが、その週の最初の日、現在の日曜日です。

　主イエスが、逮捕され十字架の死を迎えることを意識しつつ行動してきたことはすでに語ってきたことですが、ベタニアにおいて主イエスに香油を塗ったマリア同様、多くの群

衆たちが主イエスを迎えます。彼らの多くはベタニアから主イエスと共にエルサレムに入ってきた人たちですが、彼らは特別な思いでなつめやしの枝を持って主イエスを迎えます。なつめやしの枝は、今までの聖書では「しゅろの枝・木」と訳されていましたが、ギリシャ語ではフェニックスです。つまり「不死鳥」を意味し、葉を広げた様子が不死鳥になぞらえられていました。ユダヤの三大祭の一つ仮庵祭において、立派な木の実、茂った木の枝、川柳の枝を共に打ち振る舞ったことが記されており、喜び祝う時に用いられていました（レビ二三章四〇節）。つまり主イエスがエルサレムに入ることは、彼らにとっての特別な喜びの日でした。ちなみに受難週に入りますこの主の日を「しゅろの主日」と呼びます。

　ホサナ（一三節）とは「どうぞ、お救いください」というヘブライ語が、「祝福あれ」という意味で歓喜する時に用いられるようになっていました（参照・詩編一一八編二五～二六節）。彼らはガリラヤにおいて主イエスが行われた奇跡を見聞きし、ベタニアで行われたラザロの復活を知っていました。まさに主イエスこそが、神から遣わされた方であり、真のイスラエルの王であるとの思いで、彼らは心から喜びます。主イエスの弟子たちはこのことの意味を理解することができませんでした（一六節）。またファリサイ人たちも諦めムードです（一九節）。そして彼らは戦争に勝利した時の凱旋のような雰囲気です。王の王、主の主としてのイエス・キリストの姿がここに示されています。

Ⅱ　平和の使者

　しかしここに勝利を遂げた勇者のような主イエスの姿はありません。主イエスがお乗りになっているのは、ろばの子です。勇ましさはなく、むしろ子ども染みています。

　旧約の時代、主は動物の生け贄を求めましたが、その時でも、雄牛、羊、やぎ、鳩などであり、ろばは含まれていません。むしろ旧約聖書はろばを平和の使者として語ります。創世記二二章、アブラハムは主に命じられた通りに、約束の子イサクを生け贄として献げます。この時、主は薪を運ぶためにろばを用いられます。主がアブラハムとの和解を示すために用いられました。また民数記二二章では、モアブの王バラクがイスラエルの民を恐

れ、占い師バラムにイスラエルを呪わせようとします。しかしこの時、バラムのろばは口を開き、そしてバラムは三回にわたりイスラエルを祝福します。呪い戦う者ではなく、和解し平和を築く象徴として、聖書ではろばが用いられます。主イエスがエルサレムに入城する場面においても同様です。ここはゼカリヤ九章九節の成就です。この預言が来たるべきメシヤを指し示していることは、聖書に通じたユダヤ人ならば皆が知っていたことです。そしてこの旧約聖書の預言が、約束のメシアとして来られた主イエスによって成し遂げられました。

ロバは軍馬と対照的にみすぼらしいのです。日常的なことでは助けになりますが、戦争では役に立ちません。ロバに乗って来る王も力強さはありません。それでも主イエスはロバに乗ってエルサレムに入場されます。主イエスが到来することにより、地上の争いは止むからです。

Ⅲ　神の国の完成の喜び

私たちの救い主、主イエス・キリストの平和の君、王としての姿は、十字架の死と復活によって成し遂げられ、そして終末の時にすべてが明らかになります（参照・ヨハネ黙示録七章九～一〇節）。十字架に架かられる時、主イエスは群衆からなつめやしの枝によってエルサレムに迎えられ、平和の君としてろばの子に乗って入城されました。この主イエス・キリストは終わりの日に、人々からなつめやしの枝により迎えられ、真の王として、すべてのキリスト者の礼拝と讃美が献げられます。

そしてエルサレム入城の時には、立ち会えなかった私たちも、終わりの日に行われる神の国においては、主イエス・キリストの御前に立ち会う者とされます。

私たちは今から主の晩餐に与ります。この晩餐はまさに神の国における主の晩餐の前味です。あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆と共に与る晩餐を想起する時、私たちは喜びに満ちた日々を歩み続けていくことができるのではないでしょうか。

「イエスに従う」　ヨハネによる福音書一二章二〇～二六節

二〇一一年二月一三日

Ⅰ　神の栄光を表す十字架

主イエス・キリストは十字架に架かられるためにエルサレムに入城されました。つまり、逮捕され、死刑判決を受け、処刑されます。人々から見たならば敗北者の姿です。しかしこのことにより神の栄光が現れます。

イエスはこうお答えになりました。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちなければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（二三～二四節）。主イエスは「一粒の麦」の譬えにより、十字架の死が終わりではなく、出発であり、発展であることを語られます。なぜならキリストは十字架の死から三日目の朝に復活し、死に勝利を遂げられるからです。キリストの死は、他の者が代わることができない死であり、ただ一回限りの死です。だからこそキリストが一度、死を遂げられることにより、キリストにつながる他の者たちの罪は贖われ、もう死を遂げなくてもよくなります。だからこそキリストにつながる者は、キリストと同じように復活の命が与えられ、永遠の生命の約束に与ることができます。

しかし同時に、食物の種を植える時期が定まっているように、キリストの死の時も定まっていました。つまり一粒の麦は一年に一度、植える時期が定まっているように、キリストの十字架の贖いも、天地創造から最後の審判の救済の歴史にあって、この年の過越祭において人々が主による救いを覚える時でなければなりませんでした。主の時に私たちも生きており、十字架の時も主が定めておられます。

Ⅱ　ユダヤ人

　では一粒の麦が地に落ちて死ぬことによってもたらされる多くの実、つまりキリストの十字架によって救いに入れられる神の民とは誰でのことでしょうか？　主イエスはエルサレムに入城する時、多くの群衆が歓喜の喜びに満たされ、イスラエルの王としようとします。しかし彼らの殆どは、キリストが逮捕され、十字架に架かることを知ると、キリストから離れていきます。彼らが求めていたのは、イスラエルの王としてのメシアだからです。つまり、自分たちをローマから救い出す者です。しかしキリストが捕らえられ、十字架に架かることにより、イエスは一人の囚人にすぎなくなります。だからこそ彼らは失望し離れていきます。彼らは旧約預言にある神の国の完成と神の民の贖いを確認することなく、今の自分の命を大切にし、愛しています。だからこそ彼らは救いに導かれることがないことを、主イエスは語られます。

Ⅲ　キリストに従う生活

　一方、ここでヨハネによる福音書だけが記していることですが、過越祭の祭りに合わせて、礼拝するために何人かのギリシャ人がエルサレムに上ってきます。彼らは礼拝するために主イエスを捜しています。つまり彼らは、主イエス・キリストを神として受け入れ、主イエス・キリストを礼拝するために、時間を割き、体力を使い、財産を用いています。ここには自分を愛する者としての姿はなく、十字架に架かられようとする救い主メシアの姿を目撃するために、エルサレムにまで上ってきました。なぜなら主なる神は、救済の歴史の中にあって、私たちを救うために、キリストをこの世にお送りくださり、十字架の死に明け渡してくださったからです。

　私たちは、彼らから神に仕える姿を顧みなければなりません。第一に時間を献げることです。主は一週間の内の一日を安息日と定め、神を礼拝する日として求めておられます。現在、日曜日を主の日として一日、安息し、神礼拝のために時を献げることは困難になっています。しかしできる限り、私たちはそのために努力しなければなりません。その一方、主の日すら守る事のできない人たちに対して、教会は夕拝によって礼拝の場を提供しています。第二に財を献げることです。主は私たちに必要を満たしてくださっています。欲を語れば切りがありません。しかし足らないと思っていても、主は私たちの必要をすべて満たしてくださいます。だからこそ、主がお与えくださった恵みの中から、私たちは主の働きのためにも、献げることが求められています。第三に、賜物を献げることです。主は一人ひとりに異なった様々な賜物をお与えくださり、それらを用いて社会を形成すること、教会において主のために奉仕することを求めています。

　主は、御子の十字架によって救いに導かれた神の民が、救いの感謝と喜びをもって、主に仕え、主を礼拝することを喜んでくださいます（参照・ローマ一二章一～二節）。

「父なる神の栄光の現れ」

ヨハネによる福音書一二章二七～三六節

二〇一一年二月二〇日

Ⅰ　十字架に臨む主イエス・キリスト

　イエス・キリストが、聖霊によってマリアから人としてお生まれになったのは、私たち人間を救うために十字架に架かって死ぬためでした。キリスト者であれば、誰もが知っており、信じていることです。しかし、私たちはキリストの御業を直接目で見ることはできません。そのため信じていたとしても、死を前にしたキリストの苦しみのすべてを受け入れることができるものではありません。どうしても思弁的になり、信仰が希薄になりがちです。このことは、特にクリスチャンホームに育つ子供たちに言えることであり、それ故に信仰の継承は難しく、注視する必要があります。

　「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか」（二七節）。この主イエスの嘆きの声は、まさに神の御子でありながらも、苦しみも悲しみも痛みも感じておられる真の肉の体を持った人間であることを語ります。

主イエスの嘆きは、共観福音書ではゲッセマネの祈りにおいて記されています。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」「…汗が血の滴るように地面に落ちた」（ルカ二二章四二～四四節）。これと今日の御言葉とは、時間的にも異なり、語り方も異なります。しかしヨハネによる福音書が語っていることと他の福音書記者が語っている方向性にまったくの矛盾がありません。

神は無機質なお方ではなく、魂があり、感情を持っておられます。罪の故に死に行く私たち人間を惜しみ、救い出す決意をしてくださいました。そして御子は、「わたしはまさにこの時のために来たのだ」と語られているように、道半ばにおいて、苦しみ、殺されることがはっきりと定められた上で、人としてお生まれくださいました。そしていよいよ五日後に十字架が迫ってきています。心の中に抑えきれない苦しみがここにあります。

主イエスは弟子たちに、御自身の十字架の死と復活を三度にわたって語られましたが、弟子たちは主イエスの言葉を理解することができませんでした。確かに、ヨハネによる福音書は一二章に入り、ラザロの姉妹マリアから葬りのための準備として香油を塗られました。エルサレムに入城するにあたって大勢の群衆に歓喜の声で迎え入れられました。そしてギリシャ人が御自身を礼拝するためにはるばるやって来ました。しかし一番の理解者であってほしい弟子たちは主イエスが十字架の死から復活を遂げるまで、まったく主イエスの心を理解することはできませんでした。主イエスにとってこれがどれだけの苦しみだったことでしょうか。こうした思いが、主イエスの言葉に表れているのではないでしょうか。

Ⅱ　父なる神の声

この時、主イエスの叫びに対して、父なる神が応えてくださいます。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」。主イエスは常々、父なる神の御前に出て祈りを献げておられました。ですから、主イエスにとっては特別なことではありません。しかし、聖書が父なる神の御声を書き留めているのは、私たちが主を信じるために、必要なことだからです。それは、主イエスが私たちと同じ人間であることが示されているからこそ、同時に、真の神の御子、真の救い主であることが示さる必要があったからです。

新約聖書において、主イエスに対して天からの声が記されているのは三ヶ所のみです。最初は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を授かった時です（ルカ三章二一～二二節等）。これから宣教活動に入られる主イエスが、洗礼者ヨハネや今までの預言者とは異なり、御父から遣わされたメシアであることが示されました。第二は主イエスの姿が変わられた変貌の出来事です（ルカ九章二八～三六節）。この時、弟子たちは同行していましたが、この出来事を理解することができませんでした。しかし彼らは、主イエスが十字架に死と復活を遂げられた時、聖霊の働きとあいまって、真の救い主としての主イエス・キリストを受け入れ、父なる神によって与えられる神の国を理解することができるものとされていきます。それはまさに変貌の出来事、御父の声を留めていたからです。

そしてここで御父は、「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」とお語りになります。主イエス・キリストが逮捕され、十字架に架けられていこうとしている時、御父は、御子が死に打ち勝ち、罪に勝利し、罪に死に行く私たちを神の国・天国に導いてくださることによって明らかにされる神の栄光を示してくださっています（参照・フィリピ二章六～一一節）。

「あなたがたのために……」

ヨハネによる福音書一二章二七～三六節

二〇一一年二月二七日

序　御子の苦しみ

主イエス・キリストは、十字架に架かられるために都エルサレムに上ってこられました。肉の体をもった人間としてのイエスとしては、十字架を「避けて通りたい」思いがあり、

父なる神に「父よ、わたしをこの時から救ってください」（二七節）と嘆きの声を上げます。しかし同時に主イエスは神の御子として、十字架こそが父なる神から与えられた自らの使命であることを理解しておられ、十字架を避けることはなさいません。その思いが「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」（二七節）という言葉に表れています。

Ⅰ　天からの声

この時、天から「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」と語られます（二八節）。群衆の中には「雷が鳴った」（二九節）と語る者もあり、大きな声で誰からも分かるように語られたのではないでしょうか。「天使がこの人に話しかけたのだ」（二九節）と語る者もあり、天的なしるしが示されたことを理解した人もいました。しかしイエスに会いに来たギリシャ人のように、天を仰ぎ見、主なる神と御子の栄光を讃え、神を礼拝した者はいませんでした。つまり多くの人々が、天からの声が聞こえたにも関わらず、その意味を理解することはできませんでした。つまり多くの人は、天からのしるしが示されたにも関わらず、それを理解し、受け入れることはできませんでした。つまり神を信じない人々の中に、「イエスが目の前にいて、奇跡が行われれば信じる」という人たちもいます。しかし実際に目の前にイエスがおられ、主イエスが奇跡を行われたとしても、彼らはそれを受け入れ、イエスを神として受け入れることなどできません。

Ⅱ　天の声の意味

しかし主イエスは「この声が聞こえたのは……あなたがたのためだ」（三〇節）とお語りになります。主イエスの弟子たちは、主イエスの十字架の死と復活の後、聖霊の働きがなければ、この出来事の意味を理解することはできませんでした。それは私たちも同様です。福音が示され、イエス・キリストによる罪の赦しと救いが語られたとしても、聖霊が働き、自分自身の人生とイエス・キリストの十字架が結びつかなければ、信仰へとは結びつきません。それを理解し受け入れるには、主が定めてくださった時があります。

では主イエスが語られる「あなたがた」（三〇節）とは誰のことでしょうか？　直接的にはこの時、主イエスの前に立っていた弟子たち・群衆のことです。しかしこの言葉は同時に私たちに向けられています。それは主イエスの三一節の言葉で明らかになります。つまり主イエスがお語りになる「すべての人」こそが「あなたがた」です。そして今、主の御前に集められ、主イエスを信じ、主を礼拝している私たちは、信仰の故にすでにキリストの十字架により罪が贖われ、神の子とされ、永遠の生命が与えられています。つまりここに集う私たちは、すでに主イエスが語られる「自分のもとへ引き寄せよう」と語られている「すべての人」とされており、主イエスがここで語られている「あなたがた」です。

Ⅲ　最後の審判

主イエスは三二～三三節で最後の審判について言及します。ここで語られている追放されるこの世の支配者とは誰でしょうか？　ここで語られるこの世の支配者とは、サタンそのものです。キリストの復活は、この世を支配していたサタンに対する勝利をも意味しています。だからこそ、キリストの十字架の御業が成し遂げられ、キリストが十字架の死から復活を遂げられたことにより、サタンは滅び、この世から追放されています。また、サタンによって支配されている人々、つまりキリストによる救いに結果として入ることができない人々もまた同様です。今の時、終末の時代ですが、キリストの十字架により、キリストはサタンに勝利を遂げられています。確かに今なおサタンの力は世界に満ち、世界中の人々を苦しめますが、それは最後のあがきであり、キリストが再臨される時、サタンは完全に滅ぼされ、キリストの栄光が、すべての人々にはっきりと分かる形で示されます。

だからこそキリストがサタンから勝利を遂げられることにより、この世の支配者であるサタンから離れキリストによる救いにより頼むすべての民は、キリストの十字架による罪の贖いにより罪赦され、神の子とされ、天国で永遠の神の栄光に満たされます。

だからこそ私たちは、キリストの十字架・復活により、私たちの罪が赦され、キリスト同様に復活の命が与えられ、天国における永遠の祝福に満たされていることを受け入れる

べきです。この時、世に属するサタンの声・誘惑に従う者から、キリストの御声に聞き従うものへと変えられます。この世の価値ではなく、主の真理に従う者となりましょう。

「光の中を歩く」　ヨハネによる福音書一二章二七～三六節

二〇一一年三月六日

Ⅰ　メシアが上げられる？

主イエスは、十字架に架けられることの苦しみを父なる神に訴え出ます。人間としての苦しみです。神の御子でありながらも、肉の体をとられた真の人としての苦しみを訴えられています。自分たちがメシアではないかと思いエルサレムに歓喜のうちに迎えた主イエスが、死のうとされることに、群衆は気がつきます。これは、彼らのメシア像に変更を迫る問題であり、群衆の中に主イエスに対する混乱と不信感が生じることとなります。それが三四節の言葉として表れます。問いかけは二つ、「メシアがどうして上げられるのか」、「人の子とは誰のことか」です。言葉を発しているのは群衆で、律法学者やファリサイ人ではありません。主イエスに対してメシアであることの期待を持っていましたが、今その希望が揺らいでいます。

なぜなら彼らは、「メシアはいつまでも生きている」と律法によって教えられてきたからです（詩編一一〇編四節、ダニエル七章一四節など）。つまり彼らはメシアの来臨についての知識があり、メシアを信じ、待ち望んでいました。しかし旧約聖書では、メシア到来と贖いの完成、それに神の国の完成の二重性が語られています。当時このことを理解することは困難であったかも知れません。しかし旧約の時代、動物を生け贄に献げ、罪の贖いを繰り返していました。彼らはそれが影であり、メシアが贖いの完成者であることを知ることができました。

Ⅱ「人の子」とはだれ？

群衆は「『人の子』とはだれのことですか」と語ります。福音書で「人の子」について言及される時は、通常、主イエスが御自身を表現する時に用いています。つまり彼らは「人の子」＝「メシア」として理解していたのではないでしょうか。彼らの問いかけは、なぜメシアが上げられるのか？　本当にイエスがメシアなのか？　です。

この時、主イエスは人の子について言及されません。しかし二〇節からギリシャ人が主イエスの所に礼拝するために来たことが記されている場面で、「人の子が栄光を受ける時が来た」（二三節）とお語りになります。この時、主イエスはメシアとして御自身が人となられたことの意味を人々に伝えます。ユダヤ人は、イエスがメシアであり人の子であるか疑問に思い困惑していますが、主イエスは明らかに御自身が人の子であることを宣言されています。そしてメシアである主イエスが十字架の死を遂げられることを語っておられます。このメシアである主イエスによって救いに入れられようとするならば、主イエスが十字架に架けられなければならなかったことを理解し、悔い改めと信仰告白へと促されます。ユダヤ人はこのことを置き去りにしていました。

もう一つ、主イエスは異邦人であるギリシャ人が登場する時「人の子が栄光を受ける時が来た」（二三節）と語られました。つまり、神の救いの完成は、ユダヤ人にのみ成就するのではなく、異邦人、そして全世界の民に対して、神の救いの御業は示されています。

Ⅲ　光の子であるイエス・キリスト

その上で主イエスは群衆に語られました（三五～三六節）。主イエスは、人の子・メシアを光として語ることによって、人々に説明されます。

ヨハネによる福音書は、主イエスが語った言葉として、「光」を繰り返し語ります（八章一二節、一一章九～一〇節等）。ユダヤ人は光の道標として示されてきた旧約聖書の御言葉に聞いてきました。そして今、主イエス御自身が語られる御言葉に耳を傾けています。つまり旧約聖書を丁寧に読み理解していれば、御子の語られる言葉も理解できたはずです

が、理解と異なっていれば、旧約聖書を読み返し、自らの理解を修正しなければなりませんでした。

このことは現在に生きる私たちにも同様です。私たちに与えられている旧・新約聖書を丁寧に読むことにより、キリストの十字架によって私たちに救いが与えられたことは示されています。聖書と説教は、私たちを闇から救い出す光として与えられています。

この時彼らは、キリストと出会い、福音に聞く最後のチャンスでした。光が去り暗闇が訪れると、光と救いを求めることはできません。主は、常にユダヤ人と共におられ、救いの御手を伸ばしてくださっていましたが、しかし主が離れる時が来ました。だからこそ主イエスは「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい」とお語りになります。

しかし、キリストが十字架に架かって死ぬことが最後ではありません。主イエスは、十字架の死から三日目の朝に死に勝利して復活し、真の救いを私たちにお示しくださいました。私たちは御子の十字架の苦しみに止まっていてはいけません。死に勝利し、神の栄光を私たちに示してくださった主イエス・キリストの姿を顧みなければなりません。

「人の目より神からの誉れ」

ヨハネによる福音書一二章三六～四三節

二〇一一年三月一三日

序

東北で非常に大きな地震が発生しました。私たちは主の御力を知り、自らの罪を悔い改め、主の御前にへりくだることが求められています。

Ⅰ　神の御意志と私たちの生活

私たちの救い主、主イエス・キリストは十字架に架けられるためにエルサレムに上って

こられました。そして人間としての肉の弱さを訴えつつも、この十字架によって人々が救われること、その結果として神の栄光が現れることを語られました。主によって命が与えられ、すべてが満たされている私たちは、光である主なる神を求め、主の指し示す御言葉の道を歩まなければなりません。

今回の地震や私たちの毎日の生活において示される一つひとつの出来事においても言えるのですが、主は御自身が語られる言葉と御業において、私たちに主の御力を示し、私たち人間の罪と小ささ、そして主の御前にへりくだり、神による救いを求めるように迫っておられます。私たちは、主からのメッセージを受け取り、聞き従わなければなりません。

しかしユダヤ人たちは、主イエスの御言葉を理解することができず、主イエスを信じることはできませんでした。三七節で語られることは、ユダヤ人が最終的に主イエスを受け入れなかった最終的な結論が宣言されています。彼らは主イエスの語られた御言葉を受け入れることができなかったとしても、奇跡の御業を受け入れることは可能でした。しかし、それすらも拒否しました（参照・一〇章三七～三八節）。

Ⅱ　旧約聖書の預言の成就

二〇節以後の所で、異邦人であったギリシャ人が主イエスを礼拝しに来る一方、ユダヤ人は主イエスを信じませんでした。この対照的な二つの出来事が、救いの御業が完成するにあたって明らかになります。ユダヤ人はキリストを待つために整え置かれた民ですが、いざキリストが来られた時、ユダヤ人の大半はキリストを受け入れず、十字架につけてしまいます（参照・マタイ二二章一～一四節）。「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」のです（ヨハネ一章一一節）。

主イエスは、これらのことが旧約聖書の預言の成就であるとして、イザヤ書を引用して説明します。三八節はイザヤ五三章一節の引用です。イザヤ五三章は、苦難のメシアが預言されていますが、引用されている御言葉はその導入の部分です。「彼らは信じなかった」ことに焦点が置かれています。信じるか信じないかは、聞く人々の自由選択ではあり

ません。主の御腕、つまり主なる神の力の現われると、そこに信仰が起こり、告白が呼び起こされます。人々が信じなかったのは、神の力が来なかったからです。つまり神のご計画が、神の民であったイスラエルの離反と地の果てにいたる異邦人の救いとして示されています。

　次に四〇節はイザヤ六章一〇節の引用です（参照・マルコ四章一二節、使徒二八章二六節、二七節、ローマ一一章八節）。神の民・キリスト者は、主の御業が示され、御言葉が語られることにより、心が変えられ、悔い改めと主への信仰へと促されます。しかしユダヤ人たちは、神の約束の民であったにも関わらず、その地位を失います。

　ヨハネは「イザヤは、イエスの栄光を見た」と語ります。これはイザヤ六章一節、五節に基づいて語っているのですが、同時に一章一八節では「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」と語ります。つまりイザヤは主によって預言者としての召命を受けたのですが、新約の光によって確認するならば、イザヤが相対したのは、やがて授肉して人となられる御子でした。御父・御子・聖霊なる神は、三位の間に豊かな交わりがあり、このように語ることができました。

Ⅲ　目の前の人を恐れるのではなく、神を畏れよ

　旧約聖書の御言葉、そして主イエスの御業、御言葉をしっかりと見て、聞く時、私たちは神の真理に近づき、キリストの十字架の贖いによる神の救いにあることを受け入れることができます。ユダヤ人の議員の中にも、イエスを信じる者が多くいました（四二節）。しかしこれは内心です。表だった信仰の表明、信仰告白を行うことはありませんでした。なぜならば、彼らは議員としての地位が剥奪され、会堂から追放されることを恐れたからです。

　日本人の中にも、宗教・信仰は個人の心の問題であるとの認識を持っておられる方がいます。しかし神を信じることは私たちの生命そのものです。そして私たちは、下記の御言葉に耳を傾けなければなりません（マタイ一〇章二六～二八節、ヘブライ一一章一三～一

六節、ヨハネ黙示録二〇章四～六節、ローマ一〇章一〇節）。私たちは旧約の人々のように契約の民であることにあぐらをかくことなく、御言葉に聞き、主イエス・キリストの十字架にこそ救いがあることを確認し、信仰を告白し、主に従った歩みを行っていくことが求められています。

「わたしは世を救うために来た！」

ヨハネによる福音書一二章四四～五〇節

二〇一一年三月二〇日

Ⅰ　主イエスの叫び

　主イエスは、叫ばれます。ヨハネによる福音書で主イエスが叫ばれるのは、ここの他には七章二八、三七節のみです。そして、主イエスの叫びに対して、それを聞いた人々、そして私たちは何らかの答えが求められます（七章四〇～四一節）。つまり主イエスが叫ばれたのには特別な意味があり、周囲にいた人たちは、主イエスの声を聞き逃すのではなく、聞くことが求められます。聞いて理解すること、行動することが求められます。情報が多い時代、多くの言葉を聞き流しつつ、正しい判断が求められます。しかし主イエスの叫びは、すべての行動を止めて、聞かなければならない言葉です。

　大地震が発生し、大津波が押し寄せてくる時、「すぐに逃げろ」との叫びに、逃げられなかった人も多かったことでしょう。本当に心痛むことが起こりました。主イエスの叫びは、まさに私たちの命に関することが語られています。私たちは、主イエスの言葉を聞き逃していけません。主イエスの言葉を聞いて、応答することが求められています。

Ⅱ　キリストによる救い

　主イエスは叫ばれます（四四節）。すでに主イエスが繰り返し語って来られたことです。主イエスが繰り返して語られる声に対して、ユダヤ人たちは聞き入れることをしませんで

した。主イエスは、旧約の預言者イザヤの預言が実現し、彼らの心が頑ななため、彼らは信じることはなかったと宣言されました（三六～四三節）。その直後、主イエスは叫ばれました。つまりここで語られていることは、私たちに対しての最終的なメッセージです。

　ユダヤ人は、旧約聖書に記された主なる神を信じ、メシアを待ち続けると語りますが、どのようにすれば主から遣わされた方が預言者と確認することができるのか。旧約の預言者たちは人々から拒絶されました。申命記一八章一八～二〇節の御言葉に聞かなければなりません。確かに、偽預言者・偽メシアが現れます。今の時代も同様です。しかしすべてが偽メシアではありません。真実のメシアを私たちは見分けなければなりません。考える前から「そのようなことはあり得ない」と、はねつけることはできません。主イエスを目の前にしていたユダヤ人であれば、旧約聖書から確認し、語られた言葉が主からの言葉であるか、確認することが可能でした。そして、主イエスの再臨を待ちわびる私たちも、旧・新約聖書を読み、救済史的に神の契約を顧みつつ、真偽を判断することが求められています。

　主はなぜ、預言者やキリストを通して御自身を示されたのか？　旧約のイスラエルの民はメシアを求めていました。しかしここには神との人格的な交わりがありません。そのため、神の存在が抽象的で概念的な存在になってしまい、信仰もまた内的・個人的・抽象的なものとなります。父なる神が遣わされたキリストと出会うことは、私たちがキリストにより生きて働く主なる神と人格的な交わりを持つことです。今、日本全体が闇の中に置かれてしまったような状況の中、キリストは叫んでおられます。私たちは、死に行く闇の中にあることに気がつかなければなりません。今、震災という大きな災害をとおして、私たちに悔い改めと主に従う信仰を求めておられます。

Ⅲ　永遠の生命を得る

　そしてキリストは、信じることと併せて見ることも求めます。キリストの御業を視覚的に確認することです。もちろん私たちは直接キリストの御業に立ち会うことはできません。

しかし御言葉である聖書をとおして、キリストの御業に出会い、キリストの御業を見ることができます。百聞は一見にしかずです。それは知ることです。御言葉をとおしてキリストの御業を知り、受け入れることです。私たちが生きることと、キリストの御業は密接に関係しています。

　神の御子であるキリストが私たちを救い、闇から光に導くために、十字架の上で苦しみ、死を遂げられました。神の御子が人となられたのは、まさに私たちを闇の中から救い出すためでした。本当ならば私たちが背負わなければならない十字架です。キリストの叫びを聞き、キリストの十字架の苦しみを見て、知る時、私たちは決断が求められます。キリストは闇から光に、死から救いに導くために、叫ばれ、十字架にお架かりくださいました。

　今、世の裁きは猶予されています。今が悔い改めの時です。

　御子をとおして示された御父は、私たちを闇から光へ導いてくださいます。光とは永遠の命です。主は私たちの命を今取り去ることもできるお方です。今、主イエスは叫ばれます。主イエスの叫びを聞き、救いと永遠の生命を求め、神を信じなければなりません。